

黎明期ブラジル黒人運動に関する予備的考察

その展開と内的動態を中心に

矢澤 達宏*

A Preliminary Study on the Early Brazilian Black Movement, Focusing on Its Development and Dynamics

Tatsuhiko YAZAWA

Brazil saw its first black movement in the first half of the twentieth century. This article tries to outline its development, paying special attention to its internal divergences and rivalries. Although a large part of the nascent black middle class was indifferent to the movement, activists through their own newspapers tried to raise race consciousness and asserted the need for uplifting of the race as a whole. Such organizations as the Palmares Civic Center and the Brazilian Black Front even approached politicians and legislators seeking their help in exchange for blacks' support. Regardless of frequent calls for unification by one of the black journals, *The Clarion of Dawn* (*O Clarim da Alvorada*) black activists never formed any significant coalition due to differences in orientation and political affiliation. One should take account of this background when

* やざわ・たつひろ：敬愛大学国際学部助教授 ブラジルの人種間関係 / アフリカ政治
Associate Professor of Latin American and African Studies, Faculty of International Studies, Keiai University; race relations in Brazil/African politics.

examining the views and opinions of the activists that appeared in the black press.

はじめに

ブラジルのナショナル・アイデンティティと黒人運動

ブラジルにおいて2005年は、大統領令⁽¹⁾により「人種的平等促進の国民年 (Ano Nacional de Promoção da Igualdade Racial)」と位置づけられ、人種間の格差是正に向けた様々な取り組みがなされた。これに先立ち、01年頃からは一部の大学や省庁などにおいて、入学枠や採用枠の一定割合分を黒人⁽²⁾や女性への割り当てとして確保する措置がすでに導入されはじめている⁽³⁾。このようなアファーマティブ・アクションの実施にまで行き着いた、黒人に対して配慮を示す国家の姿勢は、もとをたどれば民主化にともない1988年に制定された憲法に端を発している。そこでは、諸エスニック・グループ (etnias) が歴史を通してブラジル人の形成に貢献してきたことがあらためて確認され、国家がそれぞれの文化の尊重と普及を支援する旨が明記された⁽⁴⁾。多文化主義の時流にのっとったかたちのこの表明は、実はブラジルのナショナル・アイデンティティにとって微妙な、しかし重要な変化を意味するものである。従来、ブラジルという国の中核をなすものは混血であるという主張がたびたび繰り返されてきた。「混血の国民」というナショナル・アイデンティティは、一方で黒人や先住民を国民の主要構成要素として認定しながらも、多様性よりはむしろ融合を通した統一性の方を前面に押し出したものであった。しかも、「混血」はただ単に事実そのものを表すだけにとどまらず、人種間の調和的關係をも意味するものとして、体制によりプロパガンダおよび社会統制の論理として巧妙に利用されてきたのである。

多文化主義の気運を追い風に、ブラジル黒人運動が近年、勢いを増しつつあるのはたしかである。その活動は今日、人種間の経済社会的格差を改善するための具体的施策の要求からアフリカ系文化の維持、復興まで、実

に広範にわたる具体的なものとなってきている。しかし、ブラジルの黒人運動自体は多文化主義の影響を受けて誕生したわけでは決していない。「人種の楽園」が喧伝されるようになった20世紀前半には黒人運動もすでに姿を現し、人種デモクラシーという公的イデオロギーの圧力にさらされながらも、黒人の置かれている苦境やその改善を訴えてきたのである。21世紀を迎え、多文化主義的思潮がブラジルにも波及しつつあるとはいえ、「人種間の調和を実現する混血の国」という自画像のもと、長らく自負さえされてきた白人支配階層のバターンリズムと隠蔽されてきた人種差別とが、那么容易に新たなメンタリティにとってかわられるとは想像しにくい。ブラジル黒人運動の闘ってきた人種主義が、当初から法制度のような明白に表明された有形のものではなく、個別のインフォーマルな実践であった以上、国家としての公的な姿勢に好意的な変化が見られつつあるとしても、問題の本質そのものが大きく変わったわけではない。ブラジル黒人運動の史的展開が、単なる歴史研究の枠にとどまらない現代的意義をも有する研究対象である所以は、ここにある。

本稿は20世紀前半におけるブラジル黒人運動に焦点を合わせ、従来の研究状況を参照、検討しつつ、今後の課題とされる分析視角の提起と、その予備的作業として位置づけられる黒人運動の展開過程の整理を試みるものである。

1. 先行研究の動向と課題

この分野における研究はこれまでどのように進展してきたのであろうか。ブラジル黒人運動は1910年代にその萌芽が見られ、20年代後半から30年代にかけて一つの高みに達したあと、70年代までは政治情勢などを理由に停滞を余儀なくされた。よって、現代に先立つブラジル黒人運動の歴史的局面に関する研究は、おのずと20年代から30年代の時期に比重の置かれたものとなっている。その最も先駆的な成果として挙げられるのは、51年に発表されたバスティード（Roger Bastide）による黒人新聞についての論稿⁽⁵⁾

だが、より網羅的で体系的な初の本格的分析といえるものは、65年刊行のフェルナンデス (Florestan Fernandes) の著作『階級社会における黒人の統合』(*A Integração do Negro na Sociedade de Classes*)⁶⁾ に収められた、「『黒人のあいだ』における社会運動 (Os Movimentos Sociais no “Meio Negro”) 」と題された一章であろう。その後、77年にミッチェル (Michael James Mitchell)、85年にはフェラーラ (Miriam Nicolau Ferrara) がそれぞれの観点からアプローチした研究を残している⁷⁾ が、特筆すべきは、60年代までに発行された黒人新聞のうち当時現存していたものをこの二人が可能な限りかき集め、整理してマイクロフィルムに収めたことである。複数の黒人活動家のもとにばらばらに私蔵されていたものが、マイクロフィルムにまとめられ供覧に付されるようになったことは、後学の者たちにとってはかりしれない助けとなっている⁸⁾。90年代に入ると、ブラジルの黒人問題に対する学問的関心が高まりゆくなか、2冊の注目すべき書籍が出版された。20年代から30年代にかけて黒人新聞の編集者として名を馳せたレイテ (José Correia Leite) の回顧録『……そして老活動家ジョゼ・コレイア・レイテは語った』(*...E disse o velho militante José Correia Leite*) (1992年)⁹⁾ と、30年代に活動したブラジル黒人戦線 (Frente Negra Brasileira) に関する5人の黒人活動家の回想をまとめた『ブラジル黒人戦線 証言集』(*Frente Negra Brasileira: depoimentos*) (1998年)¹⁰⁾ である。当時の活動家みずからの口で語られた内容が、活字になり公刊されたことの意義はきわめて大きい。それまで黒人運動に対する当事者自身の認識は、残された黒人新聞の紙面を除けば、数名の研究者により実施された聞き取り調査というフィルターを通して、断片的にうかがい知ることしかできなかったからである。

では、これまでの研究の内容についてはどのような評価ができるであろうか。上述のごとく、20世紀前半の黒人運動に関わる資料は、十分というにはほど遠いものの少しずつ厚みを増してきた。しかしながら、それに見合うだけの研究の深化が見られてきたかといえ、必ずしもそうとはいえない。黒人新聞の紙面分析に重きを置く系譜でいうと、バステードの論稿では全般的な性格づけにとどまっていたのを、フェラーラが論点ごと

のより詳細な考察へと深めたが、それ以降は目立った研究成果は見あたらない。一方、新聞記事を多かれ少なかれ下敷きにしながらも、その体系的な論調分析よりはむしろ黒人運動の過程や特質の考察を主眼とする系譜の方では、フェルナンデス、ミッチェルのあとにも、1990年代にアンドリューズ（George Reid Andrews）とパトラー（Kim D. Butler）が著作を発表している⁽¹¹⁾。これらのうち、黒人の政治意識や社会運動の側面に絞って分析をおこなっているのはミッチェルのみで、他の3人はあくまでも黒人をとりまく社会経済的状况全般に関する議論を展開するなかで、その一部として黒人運動をとりあげるかたちをとっている。ミッチェル、アンドリューズ、パトラーは、手つかずだった題材を分析に加えるなどしつつ、草分けであるフェルナンデスの包括的研究を批判的に再検討し、それぞれ新たな解釈なり見解なりを提示してきた。

それらの意義について逐一吟味する紙幅の余裕は残念ながらないが、本稿では逆に、十分には掘り下げられてこなかった一つの側面に目を向けてみることにしたい。すなわち、こと黒人運動の展開とその内的動態に関するかぎりにおいては、フェルナンデスの労作を超える綿密な考察がなされてこなかったという点である。これにはいささか不可解な思いを禁じえない。回顧録の刊行や黒人新聞のマイクロフィルム化により利用可能な資料がわずかずつでも増えてきたことで、おもだった黒人活動家や黒人団体のあいだの関係性や、それぞれのスタンス、方向性の相違について、さらなる分析の余地が広がってきているはずである。次節以降で詳述するが、20世紀前半のサンパウロ（São Paulo）を舞台にした黒人運動は、決して一枚岩だったわけではない。活動家たちのあいだには往々にして確執が生じ、黒人新聞の紙上で批判の応酬が繰り返られることも珍しくはなかった。しばしば指摘されるように、内部の対立はたしかに運動のさらなる高揚を制約する大きな要因の一つであったろう。しかし同時にそれは、黒人運動の研究を多様性と動態を意識した、より深みのあるものへと前進させてくれる可能性を秘めた貴重な着眼点でもあるはずだ。黒人活動家たちは、皆がビジョンを同じくしていたわけでもなければ、当時の黒人をとりまいてい

た様々な状況からの拘束性の度合いも同様であったとはかぎらない。そして離合集散を繰り返すなかで、それぞれのスタンスは変化を遂げもしたのである。

黒人運動全体の方向性や個々の黒人活動家の姿勢について考える際、画一的、固定的な視点に引きずられすぎてしまえば、その分析は表層的なものになりがちである。黒人新聞の論調を軸に据えた研究についてもいえることだが、そろそろ最大公約数的な結論づけや、異なる方向性の単なる列挙よりも、もう一步踏み込んだ分析が求められる時期に来ているのではないだろうか。フェルナンデスに続く幾人かの論者たちは運動内部の対立や多様性に言及はしながらも、その内的動態に関する考察は十分に緻密であったとはいいがたい。彼らによって提示されてきた様々な解釈は、そのような徹底した基礎的作業によってしっかりと裏付けられてはじめて、揺るぎない説得力を持ちうるように思われるのである。

そこで以下では、研究の新たな次元に向けて欠かすことのできない予備的ステップとして、20世紀前半におけるブラジル黒人運動の展開過程について、その内的動態に着目しながらあらためて整理を試みることにしたい。具体的には、聞き取り調査と黒人新聞の記事をもとに各先行研究が明らかにしてきた個々の断片を、近年になって世に出された黒人活動家の回顧録と照らし合わせて補いながら、再構成する作業であるということができよう。様々な活動家や団体が織りなすダイナミズムに対する十分な理解のうえに、今後、新聞記事などの詳細な分析が積み上げられるなら、必ずや研究の新たな地平が切り開かれていくに違いない。1980年代頃より再び盛り上がりを見せてきた黒人運動もまた、同じように内部の多様性はきわめて高い。半世紀以上の時を隔てていようとも、本稿が対象とする時期の分析から得られる示唆のなかには、今日にも通底するものが少なからずあると期待されるのである。

2. 20世紀前半におけるブラジル黒人運動の展開

20世紀の足音が聞こえはじめていた1888年になって、ブラジルの奴隷制はようやく完全に廃止され、すべての黒人は自由の身となった。しかしながら、形式上の社会秩序の変更は、当然のことながら実質的な変化をすぐさまもたらすとはかぎらない。アメリカ合衆国におけるジム・クロー（Jim Crow）のような、人種の別によって異なる扱いを定めた法制度こそ存在しなかったものの、ブラジル黒人のほとんどは20世紀に入ってから社会の底辺にとどまり続けた。その生活は奴隷制期よりもさらに悪化さえしていたほどで、社会、経済、政治といった側面で白人と伍していく兆しすら一向に見えずにいたのである。奴隷制後の新たな状況に対応し苦境に立ち向かっていくうえで、黒人たちの主体性は様々なかたちで発揮されたが、そのうちの 하나가黒人の地位向上を目的とする社会運動であった。サンパウロ市を中心に1910年代から30年代にかけて展開された黒人運動の過程をあとづけることが、本節の主眼である。

前節で提起した問題意識に従い、ここでは黒人運動と総称されるものの内的動態、すなわち主要な黒人活動家の動向や、黒人団体および黒人新聞の活動、盛衰に絞って論ずる。個々の活動家のスタンスや、各団体・新聞それぞれの方向性については、黒人新聞紙面のさらなる体系的な分析に基づいてあらためて検討されるべきと考えるため、本稿では先行研究の見解を適宜、参照しておくにとどめたい。黒人運動全体としての評価に関しても、同様の理由からひとまず議論は見送ることとする。

活動家の動向と諸団体の盛衰に注目した場合、対象とする黒人運動は次の三つの時期に分けてとらえると、その推移が比較的しやす。すなわち、第1期（1903 - 26年）は黒人社交クラブ、黒人新聞があいついで誕生し、運動の素地が作られていった時期、続く第2期（1926 - 31年）は主要な活動家が表舞台に顔を揃え、黒人の統一的組織の結成が模索された時期、さらに第3期（1931 - 37年）はブラジル黒人戦線が創設され、運動としての最

高潮を迎えた時期、という具合である。そこで以下では、それぞれの時期ごとに黒人運動の詳細をおっていくことにしよう。

(1) 揺籃期 (1903 - 26年)

黒人社交クラブの形成と黒人新聞の登場

ブラジルの黒人運動が、なぜ20世紀初頭にサンパウロという地で産声を上げ、発展を見せていったのかについては、各先行研究がすでに様々な角度から考察をおこなっている。それらの妥当性を検証することは本稿の射程外であるが、背景として挙げられてきた諸点を確認だけしておこう。各論者の見解に共通しているのは、この時期のサンパウロが近代化とヨーロッパ人移民の流入という二つの大きな変化の波に、最も激しくさらされつつあったという点である。急速な工業化や都市化により流動性の増した社会のなかで、外国人である移民が貧窮に喘ぐ黒人を尻目に着実に上昇を遂げつつあったことが、自身の置かれている状況に対する黒人の「目覚め」に様々なかたちで影響を与えたとされる⁽¹²⁾。フェルナンデスは経済的な側面に加え、近代化がもたらす規範の変化にも着目している。すなわち、支配層はあからさまな権威主義的、差別的ふるまいを徐々に許されぬようになり、旧権力構造のもとで声を奪われてきた諸集団の意見や圧力を考慮せざるをえなくなっていた⁽¹³⁾。また黒人の側に関しても、その大多数は依然、旧来のパターナリスティックな観念に縛られたままであったものの、奴隷制に代わる新たな競争的社会秩序の感化を受けた者たちが少数ながら出現し、彼らが黒人運動を担う主体となっていくとフェルナンデスは指摘するのである⁽¹⁴⁾。

では、そうした異なるメンタリティを持つに至った一部の黒人たちとは、どのような人々であったのだろうか。それはなんとか中産階級へとはい上がった、もしくははい上がろうとしていた者たちということになる。その過程で彼らが経験した社会の壁が、黒人運動の形成を促した要因の一つであったとフェルナンデスは論じている⁽¹⁵⁾。20世紀前半のサンパウロではとりわけ、人種差別やヨーロッパ人移民との競合により黒人にとっての経

済的上昇の機会はきわめて制約されていた。活動家ルクレシオ (Francisco Lucrécio) は、当時の新聞には「従業員求む、ただし黒人はお断り」といった広告が多数見られたと回想している⁽¹⁶⁾。とはいえ、アンドリュースの示すところによれば、決して多くはないものの、公務員やホワイトカラーとなる黒人たちが次第に現れていった。その典型的な職は、公立学校の教師や郵便局、税務署、市役所等の事務員や下級官吏であったという⁽¹⁷⁾。

ところで、黒人中産階級のあいだから20世紀初頭より、黒人のみを構成員とする社交クラブが次々と誕生していった。これらの団体は娯楽や文化の領域をおもな活動対象とし、ダンスパーティー、スポーツ大会、ピクニックといった行事を催すことで、黒人たちに貴重な社交の場を提供した。1904年創立の「黒手袋 (Luvas Pretas)」を皮切りに、「皇女の耳飾り (Brinco de Princeza)」、「自由のエリート (Elite da Liberdade)」、「スマート (Smart)」など無数の団体がこの時期の黒人中産階級の社会生活を彩っている⁽¹⁸⁾。なかには1908年に結成された「コスモス (Kosmos)」のように、その活動を教育の分野にも広げ、演劇のグループを有するものもあった⁽¹⁹⁾。

協同を通じた社会関係の構築という点に関しては、ブラジルの黒人はそれまでも比較的豊かな伝統を築いてきた。奴隷制期から存在してきたカトリックの信徒団体 (irmandade) に加え、20世紀に入ってからカーニバル・グループ (cordão carnavalesco) も形成されはじめていた⁽²⁰⁾。しかし、上述の黒人社交クラブが他と一線を画している点は、その顕著な白人的行動規範に対する志向である。バトラーは、品行や作法の維持に対する黒人中産階級の執着を当時の黒人新聞の記事のなかを読みとっている⁽²¹⁾。バトラーやアンドリュースの論に従うなら、それは一方で自分たちも中産階級の白人たちと同様の文化水準を保ちうることを示し、他方でネガティブなイメージの強い黒人大衆との差異化をはかることで、より完全なる上昇を成し遂げたいという願望の表れと位置づけることができよう⁽²²⁾。白人や移民たちの作る社交クラブから排除されていた中産階級の黒人たちは、目標実現のため、そうしたかたちで自分たち自身の社交界をかたちづくる道を選んだというのである⁽²³⁾。

1920年代半ばまでの時期におけるもう一つの特筆すべき動きとして、黒人新聞の出現が挙げられる。それは基本的に黒人自身の手によって運営、編集、寄稿がなされ、黒人の読者向けに、その内容を黒人に関わる様々な題材に特化させた新聞である。現在確認できる最初の黒人新聞『支柱』(*O Baluarte*)は、早くも03年に近郊のカンピーナス(Campinas)²⁴⁾で発刊されているが、15年にサンパウロ市初となる『メネリク』(*O Menelik*)²⁵⁾が登場すると、以後は毎年のように新たな黒人新聞の創刊があいついだ。先行研究で言及されているものだけでも、サンパウロ州全体で35年までにのべ30紙にもおよぶ黒人新聞が入れ替わり立ち替わり発行されたことになる(表1参照)。

黒人新聞の誕生は、黒人中産階級の形成と不可分な関係にある。第一に、社会生活の充実化を渴望していた中産階級の黒人たちにとって、黒人新聞はそうした要請に応えるものであった。1920年代半ばより自身もレイテとともに『夜明けのラッパ』(*O Clarim da Alvorada*)紙の発行に携わったデ・アギアル(Jayme de Aguiar)は、『メネリク』がサンパウロの黒人のあいだにもたらした反響は相当のものであったと回想している⁽²⁶⁾。レイテによれば、当時のイタリア人移民やドイツ人移民は、それぞれのコミュニティ向けに社交クラブとともに自前の新聞も有しており、黒人たちもそれに範をとったのだという⁽²⁷⁾。『コスモス』(*O Kosmos*)や『エリート』(*Elite*)のごとく社交クラブの公式機関紙を名乗っていたものは少数であったが、他のほとんどの黒人新聞も20年代半ばまではそれぞれ社交クラブと深いつながりを持ち、その活動や会員たちに関する話題に紙面の多くをさくことで運営を成り立たせていたと想像される⁽²⁸⁾。各クラブにとって会合や行事の予定を周知させることは肝要であったし、それらについての寸評や、黒人中産階級のコミュニティにまつわる生誕、結婚、死去といった慶弔事の告知やゴシップ記事の類は、読者の耳目を引きつけた。

第二に、黒人新聞は上昇志向を持つ黒人中産階級がその文化水準をアピールする道具でもあった。紙上、詩や随筆など短編の文学作品が多々見られること背景について、バトラーは黒人もヨーロッパ文化を修得できる

表1 サンパウロ州における黒人新聞（1903 - 37年）

| 名称 | 原語の名称 | 発行期間*1 | 発行地 |
|-----------|-----------------------------|-----------|---------|
| 支柱 | <i>O Baluarte</i> | 1903 - 04 | カンピーナス |
| バンデイランテ*2 | <i>O Bandeirante</i> | (1910) | カンピーナス |
| メネリク | <i>O Menelik</i> | 1915 - 17 | サンパウロ |
| 西の皇女*2 | <i>Princesa do Oeste</i> | (1915) | サンパウロ |
| 路 | <i>A Rua</i> | 1916 | サンパウロ |
| シャウテル | <i>O Xauter</i> | 1916 | サンパウロ |
| バンデイランテ | <i>O Bandeirante</i> | 1918 - 19 | サンパウロ |
| 団結*2 | <i>A União</i> | (1918) | カンピーナス |
| ピン | <i>O Alfinete</i> | 1918 - 21 | サンパウロ |
| 自由 | <i>A Liberdade</i> | 1919 - 20 | サンパウロ |
| 擁護者*2 | <i>A Protectora</i> | (1919) | カンピーナス |
| 衛兵 | <i>A Sentinella</i> | 1920 | サンパウロ |
| コスモス | <i>O Kosmos</i> | 1922 - 25 | サンパウロ |
| ジェットウリーノ | <i>Getulino</i> | 1923 - 26 | カンピーナス |
| 夜明けのラッパ | <i>O Clarim da Alvorada</i> | 1924 - 33 | サンパウロ |
| エリート | <i>Elite</i> | 1924 | サンパウロ |
| アウリヴェリデ | <i>Auriverde</i> | 1928 | サンパウロ |
| 支援 | <i>O Patrocinio</i> | 1928 - 30 | ピラシカバ |
| 進歩 | <i>Progresso</i> | 1928 - 31 | サンパウロ |
| キロンボ*2 | <i>Quilombo</i> | (1929) | サンパウロ |
| 鞭 | <i>Chibata</i> | 1932 | サンパウロ |
| 約束*2 | <i>Promissão</i> | (1932) | サンパウロ |
| 新たなるブラジル | <i>Brazil Novo</i> | 1933 | サンパウロ |
| 進化 | <i>Evolução</i> | 1933 | サンパウロ |
| 人種の声 | <i>A Voz da Raça</i> | 1933 - 37 | サンパウロ |
| 文化 | <i>Cultura</i> | 1934 | サンパウロ |
| ラッパ | <i>O Clarim</i> | 1935 | サンパウロ |
| 黒人論壇 | <i>Tribuna Negra</i> | 1935 | サンパウロ |
| 刺激 | <i>O Estímulo</i> | 1935 | サン・カルロス |
| 奴隷*2 | <i>Escravos</i> | (1935) | カンピーナス |

(注) *1 発行期間については、上記マイクロフィルムに収録されている号が発行された年のみを記載してある。実際の創刊はより早く、発行停止はより遅い可能性がある。

*2 これらはバステードの論稿にタイトル、創刊年、発行地の情報があるのみで、マイクロフィルムにはまったく収録されていない。

(出所) ミツェル、フェアラそれぞれの手になるマイクロフィルム(注8)参照)、およびバステードの論稿(注5参照)に基づき筆者作成。

ことの証として示す意図があったと指摘している⁽²⁹⁾。たとえば『メネリク』が「有色人のためのニュース・文学・批評の月刊紙」と銘打たれていたように、副題や発行団体名に「文学(literário)」という語を含むものは、1924年までに創刊され紙面の現存する12紙のうち、実に8紙にものぼる。『メネリク』の編集主幹ナシメント(Deocleciano Nascimento)と『ジェットウリーノ

』(*Getulino*)³⁰、『進歩』(*Progresso*) 両紙の編集で中心的役割を担ったゲデス (Lino Pinto Guedes) は、ともに詩人であった⁽³¹⁾。

自前の資金が乏しいうえに、広告主の確保や売れ行きも思うにまかせなかったため、黒人新聞の発行にはおのずと限界がつきまとった。月刊、隔週刊といったかたちをとるものもあったが、台所事情に応じて発行が不定期になることもしばしばだったようである⁽³²⁾。各号の印刷部数は、1920年代後半以降の黒人運動を担った『夜明けのラッパ』と『人種の声』(*A Voz da Raça*) の2紙で、それぞれ1,000 - 2,000部、1,000 - 5,000部程度と推計されているが⁽³³⁾、それ以前の諸紙は少なくとも後者を超える規模ではなかったと想像される。

こうした制約にもかかわらず、1920年代半ばまでの黒人新聞は黒人社交クラブとともにサンパウロの黒人たちのあいだの集団的アイデンティティ形成を促し、続いて発現していく黒人運動の下地を準備したとする評価を先行研究のなかには見いだすことができる⁽³⁴⁾。しかし、黒人中産階級がそのまま全体として黒人運動の担い手となっていったわけでないことは留意する必要がある。彼らが「惨めな」黒人大衆と同一視されるのを嫌ったことはすでに触れたが、フェルナンデスが繰り返し言及しているように、彼らの多くは黒人全体としての地位向上という大義に力を貸そうとはせず、むしろ利己的な保身に走った⁽³⁵⁾。黒人運動へと身を投じ、それを牽引していくことになったのは一部の者たちにすぎず、残る黒人中産階級コミュニティに関しても各社交クラブごとの党派意識から抜けきれずにいたという見方さえある⁽³⁶⁾。

1920年代半ばまでに黒人の集団的アイデンティティがどの程度まで形成され、それがどのように以後の黒人運動の具現化につながっていったのかについては、これまでのところ必ずしも明らかにされてはいないように思われる。ただ、少なくとも黒人新聞という意見表明の場が用意されたことは、まちがいなく次なる局面への扉を開く重要なステップであった。黒人新聞が出現してしばらくすると、社会生活に関する記事や文芸の小品に混じって人種差別の存在を暴く記事がちらほら顔をのぞかせるようになって

いった。『バンデイランテ』(O Bandeirante)第2号(1918年8月)や『ピン』(O Alfinete)第3号(1918年9月22日)に見られる記事は、その最も初期のものだとされる⁽³⁷⁾。とりわけ後者は、「……共和制がわれわれの民主主義の象徴として採り入れた人々の平等と友愛は、黒人に関するかぎり今日まで実践されることのなかった虚構であり、嘘である」とかなり直截的な言明となっている。また『バンデイランテ』第4号(1919年4月)では、「哀れで不幸なうち捨てられた」同胞に手を差しのべようとせず、みずからの楽しみに耽溺する中産階級の黒人たちへの批判も暗示されている⁽³⁸⁾。

とはいえ、それらの記事はまだ散発的に現れていたにすぎない。黒人新聞が既存のフォーマットを踏襲しつつ、その内容を黒人の地位改善に向けた意識化を促すためのもの中心へと転化させ、黒人運動を担う主体としての性格を備えるに至ったのは『ジェトゥリーノ』からといえるだろう。「黒人の利益擁護のための新聞」を謳う同紙は、ゲデスを編集主幹(redator-chefe)、ジェルヴァジオ・デ・モラエス(Gervasio de Moraes)を編集委員(redator secretario)として1923年にカンピーナスで創刊され、以後ほぼ週1度のペースで翌24年末までに計64号発行されたことが確認できる。その発行間隔や号数から見て、当時の黒人諸紙のなかでも最も活動的なものの一つであったことがうかがわれる。とりあげられた題材は多岐にわたっており、それまでの定番であった社会生活、娯楽、文芸といった分野もさることながら、黒人の置かれている社会経済的な状況、教育の重要性、人種理論、奴隷制廃止運動の活動家(abolicionista)や黒人の英傑たちへのオマージュ、奴隷のブラジルに対する貢献といったテーマが大きく扱われた。さらにはアメリカ合衆国など他地域の黒人や、アフリカにおける植民地主義にまで話題が及んでいることも新たな傾向である⁽³⁹⁾。なお、従来はわずかだった広告の掲載が際立って多いことも見てとれる。

カンピーナスを拠点に『ジェトゥリーノ』が斬新な方向性を打ち出していった時期、サンパウロではもう少し慎ましげながら、やはりそれまでとは毛色の異なる一つの黒人新聞が生まれている。二人の黒人青年、デ・アギアルとレイテが1924年1月に共同で発刊した『ラッパ』(O Clarim)(第5号

より『夜明けのラッパ』と改称)である。デ・アギアルがおもに手がけた文芸欄のかたわらで、レイテは黒人の大多数が貧苦に甘んじている状況を憂い、その改善のためには黒人全体の団結が必要であると紙面を通じて訴えかけていった。当初は寄稿者の少ないなかで地道に発行を続けたが、まもなく顕在化しはじめた黒人運動のなかで同紙は次第に大きな存在感を示していくことになる。

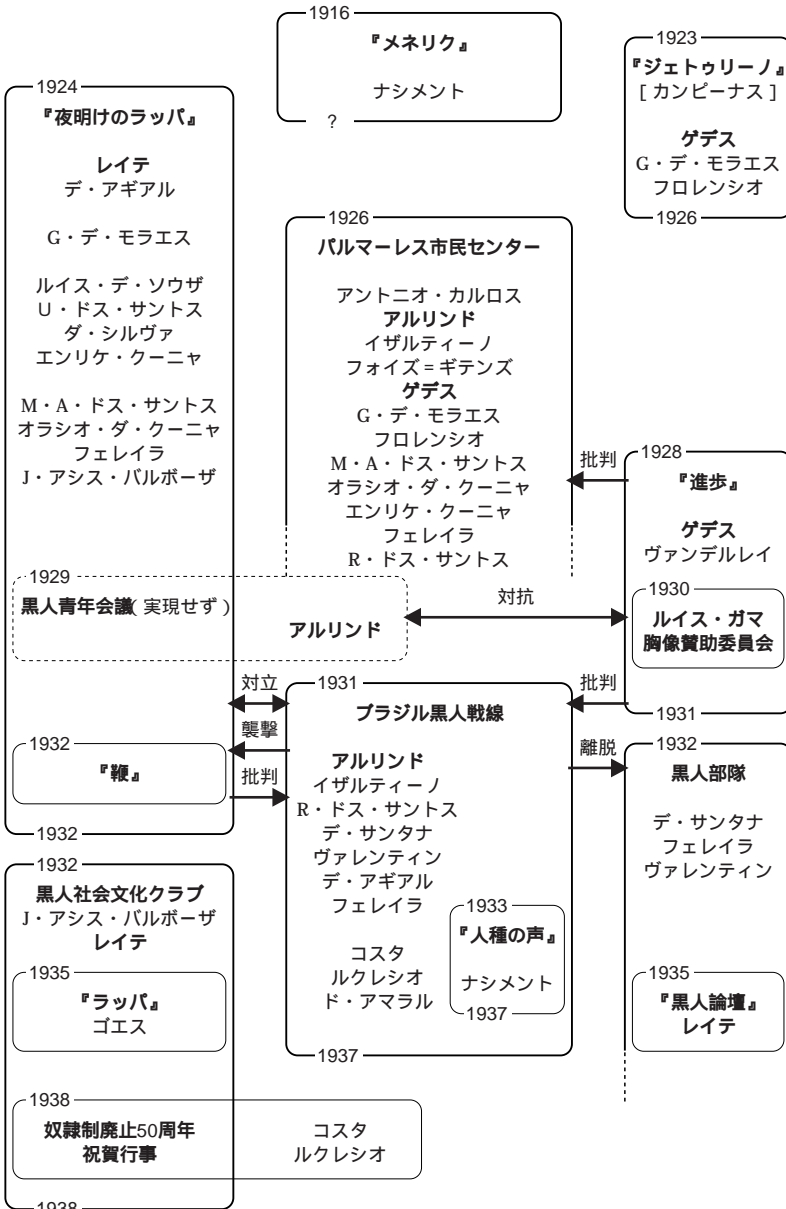
(2) 形成期(1926 - 31年) 運動の顕在化と統一の試み

『ジェットურიノ』と『夜明けのラッパ』により、黒人の「覚醒」を促すメッセージがコンスタントに発せられるようにはなったものの、当初はそれぞれ個別的な活動の域を出るものではなかった⁽⁴⁰⁾。黒人活動家たちが相互に関係をとり結び、内部に対立をはらみながらも黒人運動を主導するコア・サークルが形成されていくのは、1926年を境にしてのことである。この年はまた、黒人が紙上の「叫び」のみならず、実際の行動にも訴えるようになっていく転換点でもあった。それらの変化を象徴するのがパルマーレス市民センター(Centro Cívico Palmares)⁽⁴¹⁾の設立であろう。

州公安軍(Força Pública)軍曹の経歴を持つアントニオ・カルロス(Antonio Carlos)の発案により、同センターは1926年10月29日、黒人が集うための図書館という趣旨で発足した。しかし、補習学校の開設や劇団の結成、診療所の設置など次第にその活動の幅は広がり、さらには黒人の地位向上のため政治への直接的な働きかけをおこなうまでになっていく⁽⁴²⁾。バトラーも指摘するように、文化的・社会的機能と抗議・請願活動とを結びつけた組織のありようは、のちのブラジル黒人戦線の雛型として位置づけられよう⁽⁴³⁾。

パルマーレス市民センターは多くの活動家たちを引き寄せ、黒人運動の温床ともいうべき役割を果たしたことがうかがわれる。レイテの回想とバトラーの著作に従ってそれら面々を列挙してみると、『ジェットურიノ』で筆をふるってきたゲデス、ジェルヴァジオ・デ・モラエス、フロレンシオ(Benedicto Florencio)、ブラジル黒人戦線の創設に際し中心的な役割を果た

図1 20世紀前半におけるブラジル黒人運動の系譜



(出所) 筆者作成.

すことになるアルリンド (Arlindo Veiga dos Santos) とイザルティエーノ (Isaltino Veiga dos Santos) のヴェイガ・ドス・サントス兄弟、アルベルト・オルランド (Alberto Orlando)、ロケ・ドス・サントス (Roque dos Santos)、『夜明けのラッパ』の創刊者デ・アギアル、同紙編集部と関わりを持っていくマノエル・ドス・サントス (Manoel Antonio dos Santos)、オラシオ・ダ・クーニャ (Horacio da Cunha)、エンリケ・クーニャ (Henrique Autunes Cunha)、ジョゼ・デ・アシス・バルボーザ (José de Assis Barbosa)、さらにはリオデジャネイロ (Rio de Janeiro) からやってきたカリスマ的演説家フェレイラ (Vicente Ferreira) といった具合になる⁽⁴⁴⁾。

パルマーレス市民センターの諸活動のうち最大の成果を生んだとされるのは、市民守備隊 (Guarda Civil) の採用における黒人の排除という問題をめぐるものであった。1928年8月1日、サンパウロ州議会議員のデ・ブラド (Orlando Almeida de Prado) は黒人のブラジルに対する貢献を称える演説を議場でおこない、続いて州統領ジュリオ・プレステス (Júlio Prestes de Albuquerque) は黒人の採用を禁ずる市民守備隊の規定を撤回させたが、これらはセンターの活動家たちが政治家に対して様々な働きかけをおこなった結果とされる⁽⁴⁵⁾。さらに、衛生教育監督局と保健センターの主催する健康優良児コンクールに関しても同様に、センターの活動が実を結び、黒人児童が参加できるようになったという⁽⁴⁶⁾。

こうして従来とは一線を画した積極的な動きを見せたパルマーレス市民センターであったが、アントニオ・カルロスがサンパウロを去ったあとを引き継いで総裁となっていたフォイズ = ギテンズ (Joe Foyes-Gittens) に対する批判が1929年頃より黒人新聞に現れるようになった⁽⁴⁷⁾。3月24日付けの『進歩』は同センターの「閉鎖」を伝えている⁽⁴⁸⁾。翌30年にかけて、『夜明けのラッパ』にはデ・アモリン (Ignacio de Amorim) を中心とした再建計画を伝える記事が何度か掲載されたものの⁽⁴⁹⁾、センターが再び息を吹き返すことはなかった。しかしながら、パルマーレス市民センターという場を通して黒人活動家たちの得た経験は、黒人新聞における闘争色の鮮明化、さらにはのちのブラジル黒人戦線の誕生に大いにあずかっていたであろうこ

とは疑いない⁽⁵⁰⁾。

ところで、1920年代後半にサンパウロ市で発行されていた黒人新聞は、紙面の現存する範囲でいうと『夜明けのラッパ』、『進歩』、『アウリヴェルデ』(Auriverde)の3紙のみであるが、ある程度の期間にわたって存続したことがうかがえるのは前2紙である。パルマーレス市民センターは独自の機関紙を持っていたわけではなかったため、『夜明けのラッパ』と『進歩』は黒人運動の媒体として重要な役割を担った。

『進歩』が創刊される以前の1926年から27年にかけて、『夜明けのラッパ』は実質的に唯一の意見表明の場として黒人活動家たちの拠り所となった。カンピーナスで『ジェットゥリーノ』に携わっていたゲデス、ジェルヴァジオ・デ・モラエスは26年までにサンパウロ市に移ってきて、『夜明けのラッパ』に稿を寄せるようになる⁽⁵¹⁾。以降、アルリンドとマノエル・ドス・サントスが27年、イザルティーノが28年、フェレイラが29年よりそれぞれ同紙への寄稿をはじめた⁽⁵²⁾。

フェレイラがリオデジャネイロからサンパウロへと移り住み、黒人運動に足を踏み入れるきっかけとなったのは、在任中の27年4月27日に死去したサンパウロ州統領カルロス・デ・カンポス(Carlos de Campos Sobrinho)の埋葬の折の出来事であったとされる。サンパウロを代表する著名人たちの追悼の辞が一通り終わったあと、みすばらしい身なりの無名の黒人が突然名乗りをあげて故統領の死を悼む雄弁をふるい、聴衆のあいだに驚嘆の渦を巻き起こした。それがフェレイラであったという⁽⁵³⁾。彼は『夜明けのラッパ』の呼びかけで同年5月13日におこなわれた、奴隷制廃止運動の黒人活動家ルイス・ガマ(Luís Gonzaga Pinto de Gama)に捧げる集団墓参にも姿を現し、やはり参列者の涙を誘う演説をおこなった⁽⁵⁴⁾。フェレイラは以後、パルマーレス市民センター、ブラジル黒人戦線、黒人部隊(Legião Negra)と渡り歩いていくことになるが、その舌鋒は黒人の主張に花を添える一方で、ときに対立関係にある同胞を批判するための武器にもされた。『夜明けのラッパ』とも紙面を通じて論戦を繰り広げた時期もあったが⁽⁵⁵⁾、やがて和解に至り、のちに黒人戦線に身を寄せるまで同紙編集部と親交を保った

という⁽⁵⁶⁾。

黒人活動家以外にも、弁護士で犯罪学者のエヴァリスト・デ・モラエス (Evaristo de Moraes) から一部の有名な知識人さえ寄稿者の列に加えていった『夜明けのラッパ』だが、1928年にはその転機を告げるいくつかの変化を見てとることができる。「不本意な休止」期間ののち、2月に装いを新たに「第2期 (segunda fase)」として再登場した同紙は、副題としてそれまでの「文学・ニュース・ユーモアの新聞」に代え「黒人のためのニュース・文学・闘争」を掲げていくことになる⁽⁵⁷⁾。また形態も組合による共同運営のかたちへと改められ、支配人 (gerente) としてルイス・デ・ソウザ (Luiz de Souza)、理事 (diretor) としてパイア (Bahia) 州在住のウルシーノ・ドス・サントス (Urcino dos Santos) とダ・シルヴァ (João Soter da Silva) を迎える一方⁽⁵⁸⁾、第2期第7号 (28年8月12日付) からはデ・アギアルの編集部離脱により、彼は「創刊者 (fundador)」という名誉的な位置づけとなり、レイテが編集主幹 (redator responsável) を務めることとなった⁽⁵⁹⁾。さらに付け加えるなら、リオデジャネイロやサルヴァドール (Salvador) のほか、サンパウロ州内の数都市に次々と代理人 (representante) が置かれていき、各地での販売やニュースの収集など全国展開の試みがうかがわれるようになったのもこの年からである⁽⁶⁰⁾。こうして体制を整えた『夜明けのラッパ』は、32年5月の第2期第41号まで順調に発行を続けていく。24年の創刊から数えて合計78号におよぶ発行回数は、20世紀前半の黒人諸紙として確認できる範囲では最多である⁽⁶¹⁾。

『夜明けのラッパ』に掲載された記事の体系的な内容分析については、稿を別に譲らざるをえない。題材は『ジェトゥリーノ』でとりあげられたのと基本的には同様のものといえようが、ここではおもに1928年以降に認められる三つの特徴的な傾向だけを挙げておきたい。

第一は、「闘争 (combate)」という語が第2期の副題に採り入れられたことに象徴されるように、人種差別に対する抗議が次第に表明されるようになった点である。パトラーの指摘にもあるように、第一世代の黒人新聞は白人社会への非難よりも、黒人大衆の退廃ぶりや黒人中産階級の冷淡さ

などに向けた自己批判の方に偏重する傾向にたしかにあった⁽⁶²⁾。それでも既述のごとく、先行する諸紙では1918年頃から人種差別の存在を訴える記事が散見されてきたことを考えると、この点に関する『夜明けのラッパ』のスタンスは後発紙であるにもかかわらず、創刊よりしばらくのあいだは意外に保守的であったといえる。差別の糾弾どころか、その存在を否定する論調さえ28年あたりまでは見受けられたのである。第2期第2号(28年3月4日付)では依然、アメリカ合衆国の状況との対比において「ここには闘うべきいかなる人種差別も存在しない。われわれはブラジル白人とのみならず外国人とも完全なる共同のうちに暮らしている」との主張がなされている⁽⁶³⁾。しかし第2期第9号(28年10月21日付)になると、ポトゥカトゥ(Botucatu)市の一つの孤児院が黒人の受け入れを拒んでいることをとりあげ、強く非難する記事が掲載されている⁽⁶⁴⁾。以降、紙面には人種差別の存在を前提とした表明が現れるようになる⁽⁶⁵⁾。『夜明けのラッパ』は『進歩』とともに、人種主義とその弊害に対する意識を徐々に広めていき、次なる段階で見られた黒人による政治的行動の理論的根拠を用意したとバトラーは評価している⁽⁶⁶⁾。

第二の傾向として、黒人同胞に対する呼びかけが具体性を増し、実際の行動のイニシアチブをとりはじめたことが挙げられる。奴隷制廃止の記念日である5月13日に、数年にわたり実現した黒人による市民行進はその一例である⁽⁶⁷⁾。また、いま一つの例が1929年に浮上した黒人青年会議(Congresso da Mocidade Negra)実現の計画である。黒人のあいだの団結は、編集主幹レイテが創刊当初より訴え続けてきた、いわば宿願であった⁽⁶⁸⁾。サンパウロの黒人は「壮大で揺らぐことのない闘いをはじめするのに必要な基礎」として「単一の戦線を組織しなければならない」と彼は主張し、各黒人社交クラブの代表に参加と協力を求めた⁽⁶⁹⁾。第2期第17号(29年6月9日付)は、同会議に向けたアルリンドの手になるマニフェストも第1面全体を使って華々しく掲載している。いわく、「ブラジルは人種差別という最も重度の病に冒された広大な病院」であり、その「薬」は「政治、社会、宗教、経済、労働、軍事などブラジルのすべての生活における黒人の完全な

る統合」である⁽⁷⁰⁾。

パルマーレス市民センター凋落のあと、黒人運動の統一という夢を黒人青年会議に託そうとした者たちにとって、その反響はしかしながら期待を裏切るものであった。『夜明けのラッパ』を拠点とするグループ以外で賛同を表明した黒人活動家はアルリンドら一部にとどまり、各黒人社交クラブの代表たちもコスモス (Kosmos) のフレデリコ・バプティスタ・デ・ソウザ (Frederico Baptista de Sousa) などを除き、のきなみ消極的であった⁽⁷¹⁾。そのような折、『進歩』がルイス・ガマ生誕 100 周年を記念する胸像の建立計画を立ち上げ、黒人たちの協力を呼びかけはじめたことは、レイテにとってまさに寝耳に水だったようである。『進歩』はヴァンデルレイ (Argentino Celso Wanderley) を経営主 (propietario)、ゲデスを編集者として 1928 年 6 月 23 日に創刊され、『夜明けのラッパ』同様、20 年代後半の黒人運動を代弁する重要な役割を果たした。カーニバル・グループ「エリュシオンの園 (Grupo Carvavalesco Campos Elyseos)」の代表を務めていたヴァンデルレイや、新聞編集、詩集の刊行で名を知られていたゲデスのような影響力のある黒人が、黒人青年会議に水を差すかのような独自のプロジェクトを宣伝しはじめたことに、レイテは心中穏やかならざるものがあつた⁽⁷²⁾。このことが致命的であったのかどうかは知るよしもないが、オラシオ・ダ・クーニャやデ・アギアルの引き続いての訴えもむなしく、黒人青年会議は結局実現されぬまま、計画は立ち消えとなってしまったのである⁽⁷³⁾。対照的にルイス・ガマの胸像の方は、2 年あまりの歳月を経て 31 年 11 月 15 日に落成に至っている⁽⁷⁴⁾。

『夜明けのラッパ』に関して目につく第三の点は、国外のアフリカ系人の動向にも目を向けていったことである。こうした方向性は『ジェットウリーノ』においてもすでに芽生えていたが、『夜明けのラッパ』はさらにそれを本格化させた。きっかけとなったのは、1929 年よりはじまった、アメリカ合衆国の黒人紙『シカゴ・ディフェンダー』(Chicago Defender) とのあいだの相互交換である⁽⁷⁵⁾。同紙主幹アボット (Robert Sengstacke Abott) のブラジル訪問を機に築かれた関係を通じ、『シカゴ・ディフェンダー』の一部記事が翻訳

のうえ転載された⁽⁷⁶⁾。さらに『夜明けのラッパ』は、30年から「黒人世界 (O Mundo Negro)」なる定期特集欄を設けるまでになる⁽⁷⁷⁾。そこでは、やはりアメリカ合衆国で展開されていたガーヴィー (Marcus Aurelius Garvey) の主導する黒人運動の動向などが翻訳記事のかたちで報じられた。それらを提供したのは、パイア在住の理事二人を通して『夜明けのラッパ』とつながりを持つに至った同地の語学教師デ・ヴァスコンセロス (Mario de Vasconcelos) であったという⁽⁷⁸⁾。こうした国外の黒人運動に対する言及の背景には、ブラジル黒人の意識を高めようとする意図があったものと推察される⁽⁷⁹⁾。

(3) 高揚期 (1931 - 37年)

ブラジル黒人戦線による運動の大衆化

サンパウロを舞台とする黎明期ブラジル黒人運動の絶頂は、1931年創設のブラジル黒人戦線によってもたらされた。黒人活動家たちの糾合をなしえたとはいいがたいものの、黒人戦線は少なくとも黒人大衆の動員において一定の成功を収めた点で、黒人運動にさらなる前進を刻するものであったといえる。20世紀初頭よりその主張や活動を少しずつ明確化させてきたブラジル黒人の闘いは、しかしながら37年のヴァルガス (Gétulio Dornelles Vargas) 大統領による独裁体制の成立により、道半ばにして突然の幕引きを余儀なくされてしまうのである。

ブラジル黒人戦線誕生の背景として、レイテの回顧録やほとんどの先行研究は激動のただなかにあった当時の政治状況について言及している。1889年よりはじまる第一共和制下では、前職の推す候補が当たり前のように大統領選を制する状況が続いてきたが、1930年の選挙はそうした候補であったジュリオ・プレステスに対してヴァルガスという強力な対抗馬が出現し、従前とは異なる様相を呈していた。折しも世界恐慌の影響を受け、失業などにより生活を悪化させていた黒人たちは、こうした政治情勢の変化の兆しにみずからの状況改善の望みを託したのだという⁽⁸⁰⁾。一部の者たちは広場などに集まり熱心に政治論議を交わし、その先鋒であったイザルティー

ノがやがて結成される黒人戦線の立て役者になったとレイテは振り返っている⁽⁸¹⁾。選挙に敗れはしたものの、1930年革命と呼ばれるクーデターの発生により、ヴァルガスは臨時大統領に就任した。アンドリュースの見解によれば、1910年代から20年代にかけて揺らいできた、政治はエリートの独占物であるとの認識が、ことここに至り決定的に覆されたということになる⁽⁸²⁾。

翌1931年9月16日、アルリンドは労働者階級ホール (salão das Classes Laboriosas) にて黒人の集会を開催し、新たなる黒人組織の設立を呼びかけた。規約を採択するため同年10月12日に再び招集された会合には1,000人を超える黒人が駆けつけたという⁽⁸³⁾。パトラーによれば、アルリンドの持っていた組織化のノウハウや多くの黒人活動家たちとの面識は、それまでにパルマーレス市民センターや黒人青年会議計画に関わってきた経験のたまものであった⁽⁸⁴⁾。かくしてブラジル黒人戦線は発足し、総裁 (presidente) にはアルリンド、書記 (secretário) に弟イザルティーノ、公式演説者 (orador official) にアルベルト・オルランドがそれぞれ就き、大評議会 (Conselho Grande) にはほかに7人が名を連ねた⁽⁸⁵⁾。規約の第3条にはその目的として、「黒人の道徳、知性、芸術、技術、職業、身体の面における向上、および彼らに対する社会、法律、経済、仕事上の支援、保護、擁護」が掲げられている⁽⁸⁶⁾。

以後、黒人戦線はまたたくまに多数の黒人たちの加入を呼び、黒人運動としては未曾有の規模を誇る組織へと成長していく。『サントス日報』(*Diário de Santos*) が1931年末に報じたところによれば、創設からまもないにもかかわらず、サンパウロ市に6,000人、サントス市に2,000人の組織員 (frentenegrinos) をすでに数えるに至っていたという⁽⁸⁷⁾。これら2都市以外にも黒人戦線の影響は広まりを見せ、州内各都市はもちろん、隣接するミナス・ジェライス (Minas Gerais) 州南部の諸都市、リオデジャネイロ、さらにはバイア州やリオ・グランデ・ド・スル (Rio Grande do Sul) 州にまで提携組織の存在を確認することができる⁽⁸⁸⁾。財政面では、組織員の毎月支払う組織費や、パーティーの主催やバレエの上演による収益金などが主

たる活動資金とされていたことがうかがえる⁽⁸⁹⁾。組織費の徴収は、地区ごとに置かれた「隊長 (cabo)」を通じてきわめて効果的におこなわれたという⁽⁹⁰⁾。

黒人戦線の活動について、以下で四つのおもな側面に分けて概観してみることにはしたい。第一に、人種差別の具体的事例に対して抗議や請願といったかたちの直接行動をとったことが挙げられる。パルマーレス市民センターを先駆けとするこうした姿勢は、黒人戦線ではさらに決然としたかたちで打ち出された。当時、サンパウロや州内の諸都市には黒人が疎まれたり、閉め出されていたりした特定の場所が存在し、黒人たちもみずからそれらを回避する傾向にあったという。黒人戦線は人種差別に立ち向かう勇気を植え付ける目的で、こうした暗黙の「ルール」をあえて無視するよう鼓舞した。アルリンドの言葉を借りれば、黒人戦線は「タブーをうち破ることに挑んだのである⁽⁹¹⁾。とりわけ照準が合わせられたのは、スケートリンクへの入場と公園でのそぞろ歩きの二つであった。組織員たちはこうした場所に堂々と立ち入り、かつ折り目正しくふるまうよう促されたという⁽⁹²⁾。黒人戦線は他方で、スケートリンクの黒人差別が解消されなければ組織員たちの行動に責任は持てないと警察に対し圧力をかけ、結果的に黒人に対しても等しく門戸を開放すべしとの通達を出させることに成功したのである⁽⁹³⁾。また、パルマーレス市民センターが取り組みながら実質的な改善が見られてこなかった市民守備隊における黒人排除の問題に関しても、黒人戦線はあらためて働きかけをおこない、多数の黒人の入隊をついに実現したとされる⁽⁹⁴⁾。

二番目として、黒人戦線は娯楽・文化の様々な催しや各種の社会サービスを提供した。こうした活動は黒人社交クラブやパルマーレス市民センターのそれを踏襲するものであったが、それらに比べると社会サービスの方の拡充ぶりが際立っている。組織としては、女子舞踊団「黒薔薇 (Rosas Negras)」や楽団 (Regional)、サッカーチーム (Frentenegrino Futebol Clube) などが編成されたほか、州政府認可の学校や、図書館、歯科診療室 (Gabinete Dentario)、仕立所 (Grande Oficina de Costura)、ヘアサロン

(Salão Frentenegrino)、共済組合(Caixa Beneficiante)といったものが設けられている⁽⁹⁵⁾。これらに加え、音楽や識字の講座を開いたり、組織員が雇用主や家主とのトラブルに巻き込まれたときは、あいだに入って仲裁を試みたり、弁護士を派遣して組織員をサポートしたりもしたという⁽⁹⁶⁾。また、日曜集会(domingueira)の重要性も指摘されている。そこでは、指導的立場にあるメンバーたちの演説や、黒人の教育・啓発を目的とした衛生、育児の講座、黒人商からの購買や住居取得を促すキャンペーン、さらには詩の朗読や楽団の演奏などがおこなわれたという⁽⁹⁷⁾。こうした娯楽・文化の企画や社会的機能が大衆を動員するうえで大きな役割を果たしたとミッチェルは論じている⁽⁹⁸⁾。

第三に、新聞の発行がある。黒人戦線は設立からおよそ一年半が経過した1933年3月18日に、公式機関紙『人種の声』を立ち上げた。編集者にかつてサンパウロ市初となる黒人紙『メネリク』の編集主幹を務めたナシメントを迎えたこの新聞は、途中で週刊から隔週刊、さらには月刊へと頻度を落とすものの、黒人戦線が活動禁止に追い込まれる直前の37年11月まで計70号が発行された。ミッチェルに従えば、その紙面の半分は社会生活に関するニュース、残り半分が社会論評や指導者たちによる演説の文面、そして組織公報にそれぞれ割かれた⁽⁹⁹⁾。黒人戦線からの資金補助と広告収入によって運営されたという『人種の声』は、各地の約20の支部を通じて無償で配布され、黒人戦線に全国的組織の性格を付与する重要な意義を有したとされている⁽¹⁰⁰⁾。

最後に、政治的影響力の確保を企図した動きを挙げておかねばならない。クライエンテリズムが根を下ろす政治的土壌にのっとったかたちでの政治家への接近は、パルマーレス市民センターによってすでにはじめられ、黒人戦線も前述のごとくそれを引き継いでいた。しかし、規約の第4条では「その社会的な目的をより完全に達成するため、組織化された政治勢力として、黒人の代表となる公選の職を争う」との表明がなされており⁽¹⁰¹⁾、さらに一歩踏み込んだ政治への関与を当初から見据えていたことがうかがえる。かくして、その時は1933年にやってきた。5月3日に実施されることとな

った新憲法制定のための制憲議会 (Assembléia Constituinte) 選挙に、総裁アルリンドが立候補したのである⁽¹⁰²⁾。当選はならなかったものの、この後も黒人の有権者登録キャンペーンをおこなうなど選挙政治への参与をにらんだ活動を継続し⁽¹⁰³⁾、36年には黒人戦線の政党登録を果たすという一つの結実をみている⁽¹⁰⁴⁾。結局、最後まで当選者を出すことはあたらなかったが、ルクレシオの言によればそれはあらかじめ想定されたことだった。その意図は、「われわれも候補者となり選ばれる権利を持つ、ブラジルの市民なのだ」という意識を黒人たちに持たせることにあったと彼は言う⁽¹⁰⁵⁾。

このように、黒人戦線は黒人大衆の動員をある程度まで実現し、黒人運動に大いなる活力をもたらした。しかしながら、黒人運動の統一組織といえるほどの求心力を発揮するまでには至らなかったのも、また事実である。黒人戦線、とりわけその指導層に対し反動的な立場をとる活動家や、ここからの離反者の存在は、その活動の全期間を通じて消え去ることはなかったといつてよい。

黒人戦線に対して真っ先に異議を唱え、明確な批判的姿勢を貫いたのが、『夜明けのラッパ』のレイテと彼を中心とするグループであった。創設時には評議会の一員に加わることが予定されていたというレイテであったが、規約の内容に反対であったことから、彼のグループはその採択が予定されていた集会への参加を突如、阻まれてしまったという⁽¹⁰⁶⁾。レイテらが問題視していたのは、総裁に絶対的な権限を付与する組織形態とアルリンドのイデオロギー的志向であった。アルリンドは、ファシズムへの共感と君主制の礼賛を特徴とする新祖国運動 (patrianovismo) の信奉者で、黒人戦線の組織や運営のあり方は権威主義的色彩が強かったとされる⁽¹⁰⁷⁾。レイテの目には、アルリンドが自身の信条を広めるために黒人戦線を利用しようとしているように映ったのである⁽¹⁰⁸⁾。結局、レイテは評議員辞任を申し入れ、黒人戦線とは距離を置くことになる⁽¹⁰⁹⁾。

しかし、ことはこれだけでは収まらなかった。黒人戦線は、レイテらやその他の対抗者たちを「人種のユダ (Judas da Raça)」と裏切り者呼ばわりして敵視し、「行動を起こさず、黒人のために何らなしてきたわけでもなく、

ただ口を開き批判することしかできない」と挑発をはじめた⁽¹¹⁰⁾。そうした折、書記イザルティーノが不倫関係を結んだ女性の家族からの訴えが『夜明けのラッパ』に寄せられると、レイテらは黒人戦線指導部に対する公然とした批判に踏み切る⁽¹¹¹⁾。彼らは『夜明けのラッパ』の「名を中傷合戦で汚さぬため」、1932年2月にみずから三文新聞(pasquim)を名乗る『鞭』(Chibata)を別に立ち上げ、イザルティーノの一件を告発するとともに黒人戦線からの誹謗に挑戦した⁽¹¹²⁾。翌3月に『鞭』の2号目が出されると、黒人戦線はついに実力行使におよんだ⁽¹¹³⁾。同3月19日の夜、ロケ・ドス・サントスら7、8人の男たちが『夜明けのラッパ』編集部を兼ねていたレイテの自宅に殴り込みをかけ、家財を荒らしたのである⁽¹¹⁴⁾。同27日に号外(versão extra)として発行された『夜明けのラッパ』第2期第40号はこの暴挙を世に明らかにし、アルリンドに対し痛烈な非難を浴びせた⁽¹¹⁵⁾。しかし、同年5月に第2期第41号が発行されたものの、『夜明けのラッパ』はこの号を最後にその9年間にわたる継続的な活動に終止符を打つこととなってしまったのである⁽¹¹⁶⁾。レイテらはその後、ジョゼ・デ・アシス・バルボーザの発案により32年7月1日、黒人社会文化クラブ(Clube Negro de Cultura Social)を結成し、娯楽・文化の分野を中心とした活動へと移行していく⁽¹¹⁷⁾。一時期、ゴエス(Fernando Góes)が中心となり新聞『ラッパ』(*O Clarim*)を発行したこともあったが、『夜明けのラッパ』の後継といえるような存在感を示すことはなく、実際レイテもそれに関与することはなかったという⁽¹¹⁸⁾。

一方、黒人戦線で主要な役割を果たしながら、のちに離脱していった者たちもいた。弁護士デ・サンタナ(Joaquim Guaraná de Sant'anna)もその一人である。1930年革命までブラジル政治の主導権を握ってきたサンパウロ州では、ヴァルガスの臨時政府に対する不満が徐々に高まり、1932年7月9日に「32年革命」と呼ばれる民衆の参加をも得た武装反乱が発生したが、デ・サンタナは黒人部隊なる組織を結成し、この反乱へと投じた⁽¹¹⁹⁾。ヴァルガス支持の姿勢をとった黒人戦線からは、さらにフェレイラやヴァレンティン(Joaquim Valentim)らが去り黒人部隊に合流したが⁽¹²⁰⁾、結局「32年革命」は数ヶ月ののちに鎮圧されてしまう。しかし、この後も黒人部隊

は文民組織へと改組して活動を続けた⁽¹²¹⁾。フェレイラ、デ・サンタナはほどなく組織を離れたものの、35年にはレイテらを招き機関紙として『黒人論壇』(*Tribuna Negra*) を発行したりもしている⁽¹²²⁾。

このほか、黒人戦線の右翼志向を嫌った左派グループが分離し、黒人社会主義戦線 (Frente Negra Socialista) が結成されるなど、黒人戦線は数回にわたる大きな内部抗争を経験したとされる⁽¹²³⁾。絶対的な指導者として君臨したアルリンドやその弟イザルティーノさえも、やがて黒人戦線を追われ、その後はコスタ (Justiniano Costa) 総裁、ルクレシオ書記を中心とする体制へと引き継がれた⁽¹²⁴⁾。中産階級の黒人たちからなる上層部が、こうして組織の方向性をめぐり対立や分裂を繰り返したことで、下層労働者に属する一般組織員の心は黒人戦線から徐々に離れていったともいわれる⁽¹²⁵⁾。しかし、黒人戦線によって当時のブラジル黒人運動における最大の組織化が実現されたこともたしかである。バトラーは、多数の黒人社交クラブがそれぞれのニュースや告知を『人種の声』に掲載していることを指摘し、黒人諸団体の非公式な「包括的」組織 (“umbrella” organization) としての役割を黒人戦線が果たしていたと論じている⁽¹²⁶⁾。またフェルナンデスは、黒人戦線がその戦略として黒人たちによる「行動」に力点を置いたことを重視し、このことが黒人大衆の動員を可能にし、黒人のあいだに新たな精神的気風を生み出したと評価している⁽¹²⁷⁾。

1937年11月10日、ヴァルガス大統領は連邦、州など各レベルの議会をすべて閉鎖し、「新国家 (Estado Novo) 」と称する独裁体制の樹立を宣言した。翌12月2日に全政党の解散を命じる大統領令が出されると、前年に政党登録をしていた黒人戦線は他の諸政党と同様、活動停止へと追い込まれてしまう。ド・アマラル (Raul Joviano do Amaral) を中心に、名称をブラジル黒人同盟 (União Negra Brasileira) へと変更しての存続が模索されたが、かるうじて生きながらえることができたのは、翌38年5月13日の奴隷制廃止50周年祝賀行事までであったという⁽¹²⁸⁾。この祝賀行事はサンパウロ市文化局の発案によるものだったが、コスタ、ルクレシオ、レイテ、ゴエスらが準備委員会を組織して協力した⁽¹²⁹⁾。当日、行事には多数の黒人たちがつ

めかけ、市立劇場でおこなわれた公式式典では黒人たちによる演説のほか、詩、音楽、民俗舞踊などが披露されたという⁽¹³⁰⁾。この盛大なイベントを最後に、ブラジル黒人運動はしばしの沈黙の期間へと入っていくのである。

おわりに

刊行されたみずからの回顧録を手にする事なく、レイテは1989年2月27日に他界した。2001年には、黒人戦線について語り継いできたルクレシオもその生涯を閉じている。アルリンドやゲデスなどもとうに世を去っており、活動家本人の口から当時の黒人運動の状況を直接聞く術のなくなる日も、そう遠くはあるまい。われわれは、彼らの残した新聞、著作、証言など限りある貴重な資料を、つぶさに検討していく必要性にいつそう迫られていくことになるだろう。

本稿では、先行研究および活動家の残した証言をもとに、20世紀前半におけるブラジル黒人運動の展開を追い、その動態を浮かび上がらせることを試みた。その過程においては、一つひとつの事実の裏付けとなるような新聞記事をできるかぎり特定して提示するよう心がけ、それが見いだせない点に関しては先行研究の見解を引用している。

前節で見てきたように、「ブラジル黒人」と一口に言っても、中産階級に属する少数の者たち、そのさらに一部が母体となった活動家たち、そして貧困層に属する一般大衆と、とりまく状況や追求する方向性の大きく異なる各層に分化していた。また、黒人運動内部、さらには一つの黒人団体のなかでさえ、主張のくい違いや組織間、構成員間の抗争、反目がしばしば見られたのだった。こうした相違や確執のなかには、主導権をめぐる単なる対抗意識に起因するものもたしかに少なくなかろう。しかし、運動の方向性や手段についての多様な考え方が確実に反映されていたことも事実であるし、また、現状を変革する「力」に乏しい黒人たちが戦略として政治への接近をはかり、その動向に翻弄される様も見てとることができる。

黒人新聞の論調、ひいては黒人運動の方向性に関する体系的かつ綿密な

分析にまで、本稿は踏み込んではいない。その本格的な考察をおこなって
いくうえでは、対象とする記事や発言について、どのような位置にある者
の、誰に向けた、いかなる目的のものなのかをしっかりと考えあわせてい
く必要がある。本稿の眼目は、そうした文脈や背景を整理して提示する
ことにほかならない。昨今、ブラジルの黒人をめぐる諸問題の論点は、か
つてよりもいっそう多様化、複雑化してきている。今日の黒人運動におけ
る様々な主張に関する検討も、本稿で試みたような作業を土台にして積み
重ねていく必要がある。

(注)

- (1) Presidência da República, Decreto de 30 de dezembro de 2004.
- (2) ブラジルでは、社会通念上あるいは統計において、混血に相当する中間的人種カテゴリーを設けることが一般的である。しかしながら黒人運動の主張や実際の担い手に関するかぎり、アフリカ系の混血を区別して扱ってきてはいない。よって本稿においては、アフリカ系人全体を包括する概念として「黒人」という言葉を用いる。なお、これに相当するものとして、近年は「アフリカ人の子孫たち (afro-descendentes)」という語を用いることがしばしばある。
- (3) 詳しくは、たとえば Rosana Heringer, “Ação afirmativa, estratégias pós-Durban,” *Observatório da Cidadania: Relatório 2002*, n° 6, Rio de Janeiro: Instituto Brasileiro de Análises Sociais e Econômicas, 2002, pp. 55–61を参照のこと。上記文献は以下よりアクセス (2005年11月20日) した。 http://www.socialwatch.org/es/informeImpreso/pdfs/book2002_bra.pdf
- (4) ブラジル連邦共和国憲法 (1988年) 第242条第1項および第215条。
- (5) Roger Bastide, “A Imprensa Negra do Estado de São Paulo,” *Estudos Afro-Brasileiros*, 2ª série, Boletim CXXI, Sociologia n° 2, Faculdade de Filosofia, Ciências e Letras da Universidade de São Paulo, 1951. 本稿では以下に再録されたものを参照した。Roger Bastide, *Estudos Afro-Brasileiros*, São Paulo: Perspectiva, 1983.
- (6) 本稿では1978年の第三版を参照した。Florestan Fernandes, *A integração do negro na sociedade de classes* (3ª ed.) 2 volumes, São Paulo: Ática, 1978.
- (7) Michael James Mitchell, *Racial Consciousness and the Political Attitudes and Behavior of Blacks in Sao Paulo, Brazil*, Ph.D thesis, Indiana University, 1977、および Miriam Nicolau Ferrara, *A imprensa negra paulista (1915–1963)*, São Paulo: Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Sociais, 1986.
- (8) 黒人新聞を収録したマイクロフィルムは、ミッチェルによるものが *Jornais negros brasileiros*、フェラーラによるものが *Jornais da Raça Negra* (2巻) のタイトルでサンパウロ大学のブラジル研究所 (Instituto de Estudos Brasileiros) に所蔵されている。後者はサンパウロ市立マリオ・デ・アンドラーデ図書館 (Biblioteca Municipal Mário de Andrade) にも所蔵がある。
- (9) José Correia Leite (organização e textos: CUTI) ... *E disse o velho militante José Correia Leite*, São Paulo: Secretaria Municipal de Cultura, 1992.
- (10) Aristides Barbosa, Francisco Lucrécio, José Correia Leite, Marcello Orlando Ribeiro e Placidino Damaceno Motta (entrevistas e textos: Márcio Barbosa) *Frente Negra Brasileira: Depoimentos*, São Paulo: Quilombhoje, 1998.

- (11) George Reid Andrews, *Blacks and Whites in São Paulo, Brazil, 1888-1988*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1991、および Kim D. Butler, *Freedoms Given, Freedoms Won: Afro-Brazilians in Post-Abolition São Paulo and Salvador*, New Brunswick and London: Rutgers University Press, 1998.
- (12) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, pp. 14-15 & 19; Mitchell, *op. cit.*, pp. 121-124; Ferrara, *op. cit.*, pp. 34-39; Butler, *op. cit.*, pp. 70, 88-89.
- (13) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 12.
- (14) *Ibid.*, p. 66.
- (15) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 13.
- (16) Barbosa et al., *op. cit.*, p. 32.
- (17) Andrews, *op. cit.*, pp. 125-128.
- (18) *Ibid.*, pp. 141-142; Butler, *op. cit.*, pp. 82-83.
- (19) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 41.
- (20) Butler, *op. cit.*, pp. 78-82; Andrews, *op. cit.*, pp. 139-141.
- (21) Butler, *op. cit.*, p. 92.
- (22) Bastide, *op. cit.*, pp. 130-131; Andrews, *op. cit.*, pp. 140-141.
- (23) *Ibid.*, p. 141.
- (24) カンピーナスはサンパウロ市の北東 100km あまりに位置する都市であり、当時はサンパウロ市以上に人種差別が激しかったという。Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 18; Ferrara, *op. cit.*, p. 54. ルクレシオの回想にもそれを示唆するような部分が見られる。Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 36-37.
- (25) この名称は、創刊の前々年にあたる 1913 年に逝去したエチオピア皇帝メネリク 2 世 (Menelik II) からとられている。“O Menelik,” *O Menelik*, Ano I, Num. 1 (17 de outubro de 1915)
- (26) Clóvis Moura, “Organizações Negras” em Paul Singer e Vinícius Caldeira Brant (org.) *São Paulo: O povo em movimento*, Petrópolis: Vozes, 1980, p. 150.
- (27) Leite, *...E disse o velho militante*, p. 33.
- (28) Mitchell, *op. cit.*, p. 154; Butler, *op. cit.*, pp. 90-92.
- (29) *Ibid.*, pp. 93-94.
- (30) 「ジェットウリーノ」は、黒人作家で奴隷制廃止運動の活動家でもあったルイス・ガマが用いた筆名の一つであった。
- (31) ゲデスは、『黒人詩人の絶筆』(*O canto do Cisne Preto*) (1926 年) をはじめとする数点の著作を残した。ナシメントについては、Moura, *op. cit.*, p. 33 を参照。
- (32) Ferrara, *op. cit.*, p. 52. フェラーラが提示している限りでは、1924 年創刊の『ジェットウリーノ』以降、『アウリヴェルデ』、『人種の声』と計 3 紙が週刊であったが、それら以前に定期刊行のかたちをとっていたものはいずれも月刊または隔週刊であった。Ferrara, *op. cit.*, pp. 235-260.
- (33) *Ibid.*, pp. 246, 256.
- (34) *Ibid.*, p. 51; Butler, *op. cit.*, pp. 82, 90-91.
- (35) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2、とくに pp.13-14 および pp. 72-73.
- (36) Bastide, *op. cit.*, pp. 155-156. パトラーは黒人新聞間の対抗意識についても指摘している。Butler, *op. cit.*, pp. 92-94.
- (37) Joaquim Cambará, “Deputado de côr,” *O Bandeirante*, Ano I, Num. 2 (agosto de 1918) Oliveira, “Para os nossos leitores,” *O Alfinete*, Ano I, Num. 3 (22 de setembro de 1918) 前者はパトラー、後者はアンドリュースの著作にそれぞれ引用がある。Butler, *op. cit.*, p. 94; Andrews, *op. cit.*, p. 139.

- (38) D'Alencastre, "Em ferro frio," *O Bandeirante*, Ano I, Num. 4 (abril de 1918) バトラーはこの記事の大部分を引用している。Butler, *op. cit.*, pp. 85-86.
- (39) 筆者はかつて、アフリカや国外のアフリカ系人を題材にした記事に対象を絞って、その論調の分析を試みたことがある。矢澤達宏「20世紀前半のブラジル黒人新聞のなかのアフリカとアフリカ系人 アフリカ志向の観点から評価するブラジル黒人運動」『アフリカ研究』第56号(2000年3月) 1 19ページ。
- (40) ただし、『ジェットウリーノ』と『夜明けのラッパ』とのあいだにコンタクトがなかったわけではない。前者はその紙面で後者の発刊に祝辞を送り、後者は前者の創刊一周年によせて「同志」と称え、その二人の編集者へのオマージュを写真付きで掲載している。Getulino, Ano I, Num. 25 (13 de janeiro de 1924); *O Clarim da Alvorada*, Ano II, Num. 12 (25 de janeiro de 1925)
- (41) パルマーレスという名称は、17世紀にブラジル北東部に存在した一つのキロンボ(Quilombo)にちなんだものである。キロンボとは逃亡奴隷のコミュニティのことであるが、なかでもパルマーレスは強大な勢力を誇り、100年近くにわたり植民地政府に対して自律性を保ったとされ、今日においてもブラジル黒人の抵抗のシンボルとして位置づけられている。
- (42) "Pedra que rola da montanha..." & "Album: Antonio Carlos," *Progresso*, Ano I, Num. 10 (24 de março de 1929) Butler, *op. cit.*, p. 103.
- (43) *Ibid.*, p. 105.
- (44) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 73-76, 169; Butler, *op. cit.*, pp. 103-107. バトラーはパルマーレス市民センターのメンバーとしてレイテの名も挙げているが、彼本人は回顧録のなかで『夜明けのラッパ』の編集で忙しく、参加できなかったと語っている。のちにフェレイラとのあいだでもちあがった論争の内容から考えても、レイテのセンターへの関与は少なくとも深いものではなかったと想像される。注(55)および Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 62-63を参照されたい。
- (45) ミッチェルのエンリケ・クーニャに対する聞き取り調査による。Mitchell, *op. cit.*, p. 125-126. さらには、Butler, *op. cit.*, p. 104を参照のこと。ただし、ミッチェルによればデ・ブラドの演説は市民守備隊の方針を覆すには至らず、またバトラーは市民守備隊に黒人が実際に採用されるようになったのは1930年代初頭になってからだとしている。ルクレシオの証言もそれらと符合している。Barbosa et al., *op. cit.*, p. 55. アンドリユーズは、黒人の採用を禁ずる規定が撤回されたあとも、市民守備隊の黒人差別はインフォーマルなカタチで継続したとの見方を示している。Andrews, *op. cit.*, pp. 150-151. なお『夜明けのラッパ』第2期第18号(29年7月14日付)は、市民守備隊への入隊者募集告知が好ましい条件の一つとして白人であることを明記している点を問題視する記事を他紙より転載している。"A cor e a Guarda Civil," *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 18 2ª fase (14 de julho de 1929)
 デ・ブラドの演説とジュリオ・プレステスによる措置については、以下に報じられている。"Gesto nobre" & Horacio Cunha, "Guarda Civil e os pretos," *Progresso*, Ano I, Num. 3 (19 de agosto de 1928); "Preconceito da raça," *Progresso*, Ano I, Num. 4 (7 de setembro de 1928); "Preconceito tolo e absurdo," *Progresso*, Ano I, Num. 5 (12 de outubro de 1928)
- (46) "Preconceito tolo e absurdo," *Progresso*, Ano I, Num. 5 (12 de outubro de 1928); "Pedra que rola da montanha..." *Progresso*, Ano I, Num. 10 (24 de março de 1929)
- (47) たとえば、João Lucio Affarez, "Aos directores do C. C. Palmares," *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 13 2ª fase (3 de fevereiro de 1929) フォイズ = ギテンズはイギリス黒人であったという。Leite, ...*E disse o velho militante*, p. 73.
- (48) "Pedra que rola da montanha..." *Progresso*, Ano I, Num. 10 (24 de março de 1929) ミッチェルによれば、デ・ブラドに対して「見返り」を与えるべきか否かをめぐってセンターのメンバー間に亀裂が生じ、これが多くの離脱者を生むことになったとしている。Mitchell, *op.*

- cit.*, pp. 125–126.
- (49) *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 17 2ª fase (9 de junho de 1929); “Ignacio de Amorim e o C. C. Palmares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 18 2ª fase (14 de julho de 1929); “O Centro Civico Palmares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 19 2ª fase (18 de agosto de 1929); “C. C. Palmares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 20 2ª fase (28 de setembro de 1929) Ignacio Amorim, “Centro Civico Palmares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) “Palmares’: Uma grande obra que se desenha,” *Progresso*, Ano II, Num. 18 (24 de novembro de 1929); “Centro Civico Palmares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 23 2ª fase (25 de janeiro de 1930) 実質をともなっていたかどうかは不明だが、その後もバルマーレス市民センターの名は黒人紙に見られる。たとえば、Manoel Antonio dos Santos, “Eu e o Sr. Ignacio de Amorim,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 33 2ª fase (20 de dezembro de 1931) を参照。
- (50) Butler, *op. cit.*, pp. 100, 105–106, 113; Andrews, *op. cit.*, pp. 147–148; Mitchell, *op. cit.*, p. 129.
- (51) Renato Jardim Moreira e José Correia Leite, *Movimentos sociais no meio negro*, Ms, pp. 3–4 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 18) Butler, *op. cit.*, p. 103; Leite, *...E disse o velho militante*, p. 38. 現存する紙面に限って言えば、『ジエトゥリーノ』で1925年に発行されたものは確認できず、その後は26年5月13日付けの“Ano III, Num. 1”という号が残されているのみである。「仮編集部」の住所から判断して、この号はサンパウロ市で発行されたものと推察される。*Getulino*, Ano III, Num. 1 (13 de maio de 1926) ゲデスらはより多くの読者を当て込んでサンパウロ市へと移ってきたがうまくいかなかったとしているミッチェルの論は、おそらく妥当であろう。Mitchell, *op. cit.*, p. 127. 『夜明けのラッパ』への寄稿は、ジェルヴァジオ・デ・モラエスが第17号より、ゲデスが第19号 (“Laly”なる筆名を使用) より見られる。Gervasio de Moraes, “Mendigo” & “Dominicaes,” *O Clarim da Alvorada*, Ano II, Num. 17 (27 de dezembro de 1925); Laly, “Klaxonadas...,” *O Clarim da Alvorada*, Ano III, Num. 19 (21 de março de 1926)
- (52) A. J. Veiga dos Santos, “À gente negra” & “A acção dos negros Brasileiros,” *O Clarim da Alvorada*, Ano IV, Num. 28 (15 de janeiro de 1927); Manoel Antonio dos Santos, “Impulsos do coração,” *O Clarim da Alvorada*, Ano IV, Num. 34 (18 de junho de 1927); I. Veiga dos Santos, “A uma joven negra: que aspira pela liberdade d’uma raça,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 7 2ª fase (12 de agosto de 1928); Vicente Ferreira, “Angelo Agustini: O juvenil do lapis,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 17 2ª fase (9 de junho de 1929)
- (53) Leite, *...E disse o velho militante*, p. 61. このときの様子は以下で詳しく描写されている。José Correia Leite, *O alvorecer de uma ideologia*, em Leite, *...E disse o velho militante*, pp. 293–294.
- (54) Leite, *...E disse o velho militante*, p. 61.
- (55) バルマーレス市民センターに対して無関心なサンパウロの黒人たちをこきおろす記事をフェレイラが『サンパウロ・ジャーナル』(*São Paulo Jornal*)に投稿したのに対し、レイテは『夜明けのラッパ』紙上でこれを批判した。Leite, “Verdadeiras verdades,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 1 2ª fase (5 de fevereiro de 1928) 続いてさらなる応酬もなされている。Leite, “A resposta do Prof. Vicente Ferreira,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 2 2ª fase (4 de março de 1928)
- (56) 和解の経緯とその後のフェレイラについては、Leite, *...E disse o velho militante*, pp. 62–72 を参照のこと。
- (57) 紙面の現存する範囲でいうと、1927年10月15日付けで第36号が発行されたあと、第2期第1号が発行されるまで3ヵ月半ほどの空白期間が存在する。また、第35号と第36号の間隔もやはり3ヵ月ほどあいており、レイテはそれを創刊当初より変わらぬ経営の苦しさによるものとしている。Leite, “Um caso perdido,” *O Clarim da Alvorada*, Ano IV, Num. 36 (17 de out-

- ubro de 1927) 第2期の副題については、*O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 1 2ª fase (5 de fevereiro de 1928)を参照のこと。副題には、のちに「黒人青年の公式紙」とも掲げられるようになっていく。
- (58) ルイス・デ・ソウザ、ウルシーノ・ドス・サントス、ダ・シルヴァに関しては、それぞれ以下などを参照されたい。“Luiz de Souza,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 23 2ª fase (25 de janeiro de 1930) ; “Urcino dos Santos,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 23 2ª fase (25 de janeiro de 1930) ; “João Soter da Silva,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 22 2ª fase (24 de novembro de 1929) ; “João Soter da Silva,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VII, Num. 25 2ª fase (13 de abril de 1930)
- (59) *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 7 2ª fase (12 de agosto de 1928)レイテによれば、デ・アギアルの離脱は結婚を機とするものであった。Leite, *...E disse o velho militante*, pp. 40-41. ただし、彼は以後も寄稿は続けている。
- (60) 第2期第5号(1928年6月3日付)にリオデジャネイロ、サントス(Santos)、サルヴァドールにおける代理人の情報が掲載されたのを皮切りに、翌年にかけて新たな都市への代理人設置があいついでいる。
- (61) 1932年における発行休止の後に確認できるのは、33年5月13日付けの第2期第42号と40年9月28日付けの第3期第1号のみである。*O Clarim da Alvorada*, Ano X, Num. 42 2ª fase (13 de maio de 1933) ; *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 1 3ª fase (28 de setembro de 1940)
- (62) Butler, *op. cit.*, p. 98.
- (63) L. “Na terra do preconceito,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 2 2ª fase (4 de março de 1928) 寄稿者名は“L.”とのみされているが、レイテによるものと想像される。なお記事では“preconceito (偏見)”という語で表現されているが、フェルナンデスは当時の黒人たちが用語上“preconceito”と“discriminação (差別)”との区別をしてはならず、差別をも含む概念として前者を用いていたと指摘している。筆者もこれに同意し、「差別」と訳した。
上記以外に人種差別の存在を否定する記述を含むものとして、たとえば以下のような記事が挙げられる。Leite, “Porque queremos a confederação: A lucta moderna é do preto contra o proprio preto,” *O Clarim da Alvorada*, Ano III, Num. 20 (25 de abril de 1926) ; Leite, “Quem somos...,” *O Clarim da Alvorada*, Ano III, Num. 27 (14 de novembro de 1926)
- (64) Leite, “Mais um grito de dor da raça desgraçada: Um orphanato que não aceita orphãos negros,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 9 2ª fase (21 de outubro de 1928) 記事をきっかけにこの孤児院には黒人孤児の姿も見られるようになり、このことは『夜明けのラッパ』が現実に社会的役割を果たしていることを実感させるものだったとレイテは振り返っている。Leite, *...E disse o velho militante*, pp. 79-80.
- (65) たとえば、次のようなものがある。Veiga dos Santos, “Congresso da Mocidade Negra Brasileira: Mensagem aos negros brasileiros,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 17 2ª fase (9 de junho de 1929) ; “Ha males que veem para bem: O preconceito da côr,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) ; “13 de maio,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VII, Num. 26 2ª fase (13 de maio de 1930)
- (66) Butler, *op. cit.*, p. 107.
- (67) これは、ルイス・ガマをはじめとする奴隷制廃止に功のあった活動家たちの墓を訪れるというものであった。現存する紙面から、少なくとも1927年、28年、29年に計3回はおこなわれたことが確認できる。Leite, “Um acto de civicismo...,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 31 (17 de abril de 1927) ; “Romaria civica,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 3 2ª fase (1 de abril de 1928) ; “Apos a grande romaria da saudade, São Paulo assistiu a magestosa passeata civica da raça negra em homenagem a imprensa e aos lidadores da penna,” *O Clarim da*

- Alvorada*, Ano I, Num. 17 2ª fase (9 de junho de 1929)
- (68) レイテは『夜明けのラッパ』の創刊からまもない1924年4月6日付けの第4号で、「黒人連合 (Confederação dos homens pretos)」の構想を抱いていることを明かしている。Leite, “Valor da raça,” *O Clarim da Alvorada*, Ano I, Num. 4 (6 de abril de 1924) このあと、黒人のあいだの団結の試みが伝えられては消えていくたびに、彼は一喜一憂を繰り返した。
- (69) Leite, “À mocidade negra,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 14 2ª fase (3 de março de 1929) Leite, “À mocidade negra,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 16 2ª fase (13 de maio de 1929)
- (70) Veiga dos Santos, “Congresso da Mocidade Negra Brasileira: Mensagem aos negros brasileiros,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 17 2ª fase (9 de junho de 1929)
- (71) フレデリコ・バプティスタ・デ・ソウザの黒人青年会議への支持は、たとえば以下に見られる。Frederico Baptista de Sousa, “O negro deve ser politico?” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929)
- (72) 「きみたちは黒人青年会議を続けたまえ、われわれはルイス・ガマの胸像 (建立) の計画をはじめることにする」といったゲデスの言いように、レイテは憤りを覚えたという。Leite, ...*E disse o velho militante* pp. 83-88. ただし紙面上では、『進歩』紙のイニシアチブに対する称賛と協力が表明されており、またルイス・ガマ胸像賛助委員会 (Comissão pro Herma Luiz Gama) の一員として『夜明けのラッパ』紙は名を連ねてもいる。 *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) “A voz do bronze,” *Progresso*, Ano II, Num. 20 (31 de janeiro de 1930)
- 胸像建立計画については、これらのほか以下を参照のこと。“Luiz Gama, o mestiço que fez a abolição vae ter uma herma,” *Progresso*, Ano II, Num. 17 (31 de outubro de 1929) “A força da palavra,” *Progresso*, Ano II, Num. 21 (15 de fevereiro de 1930) “Vae ser collocada no Largo do Arouche a Herma de Luiz Gama: O esforço dispendidos pelos pretos de S. Paulo e a cooperação das altas autoridades em prol dessa grande realização,” *Progresso*, Ano III, Num. 33 (fevereiro de 1931)
- (73) Horacio da Cunha, “O Congresso da Mocidade Negra: Aos pretos sensatos,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 20 2ª fase (28 de setembro de 1929) Jayme de Aguiar, “Faremos o Congresso...,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) “Os adversarios de si mesmo e o nosso congresso,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 23 2ª fase (25 de janeiro de 1930)
- (74) “Aurora de um grande feito: Às 9 horas, lança-se, hoje no Largo do Arouche, a primeira pedra da herma á Luiz Gama,” *Progresso*, Ano IV, Num. 42 (15 de novembro de 1931); “Vicente Ferreira,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 33 2ª fase (20 de dezembro de 1931)
- (75) “The Chicago Defender: World’s-Greatest-Weekly,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 22 2ª fase (24 de novembro de 1929) を参照せよ。
- (76) この経緯については、次に詳しい。Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 78-79. 転載記事には、たとえば以下のようなものがある。“The Chicago Defender: Viagem do Sr. Robert S. Abott á França,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 23 2ª fase (25 de janeiro de 1930) “Um lynchamento em em Texas: Do “The Chicago Defender’,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VII, Num. 25 2ª fase (13 de abril de 1930)
- (77) この特集欄は第2期第31号 (1930年12月9日付) からはじまっている。これ以前にも、デ・ヴァスコンセロスの翻訳、寄稿による単発記事は存在する。Arthur S. Gray, “O povo preto deve dictar seu proprio termo de salvação,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VII, Num. 25 2ª fase (13 de abril de 1930)
- (78) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 77-78. デ・ヴァスコンセロスについては、以下に紹介

- がある。“Mario Vasconcelos,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 35 2ª fase (23 de agosto de 1931)
- (79) この点に関しては別稿にて詳しく論じた。矢澤達宏、前掲論文。
- (80) Moreira e Leite, *op. cit.*, pp. 13–14 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, pp. 20–21)
- (81) Leite, *...E disse o velho militante*, pp. 88–93. 市民守備隊における黒人排除の問題で黒人活動家の訴えに耳を傾けたジュリオ・ブレステスに対し、『夜明けのラッパ』や『進歩』には好意的な論調が見られたが、一方にある従来の支配層に対する反感とのあいだで揺れる黒人活動家たちの複雑な胸中をバトラーは推しはかっている。Butler, *op. cit.*, pp. 111–112. さらに、Mitchell, *op. cit.*, pp. 129–130 も参照のこと。ジュリオ・ブレステスへの共感には以下に示されている。Gastão Carneiro, “O direito dos pretos,” *Progresso*, Ano I, Num. 6 (15 de novembro de 1928) “Governar S. Paulo é governar uma nação: E, o actual governo demonstra essa realidade” & “Vicente Ferreira o tribuno negro, apoia a candidatura Prestes e Vital Soares,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 19 2ª fase (18 de agosto de 1929) Ferreira, “S. Paulo vencerá,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) また、支配層への不満は次のものに見てとれる。Moreira e Leite, *op. cit.*, pp. 13–14 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, pp. 20–21); Frederico Baptista de Sousa, “O negro deve ser politico?” *O Clarim da Alvorada*, Ano VI, Num. 21 2ª fase (27 de outubro de 1929) 他方、アルリンドはヴァルガスを支持しており、黒人活動家たちは二つに割れている。
- (82) Andrews, *op. cit.*, p. 148.
- (83) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 47; Artur Ramos, *O negro na civilização brasileira*, Rio de Janeiro: Casa do Estudante do Brasil, 1971, p. 194; Ferrara, *op. cit.*, p. 66. 規約の採択がおこなわれた会合の日付に関して、バトラーの著作のみが9月28日としている。Butler, *op. cit.*, p. 113. たしかに『夜明けのラッパ』と『進歩』はそれぞれ9月28日に会合が催されたことを報じているが、この日に規約の採択がおこなわれたかどうかは定かでない。Henrique Autunes Cunha, “Frente Negra do Brasil: A Ressurreição Negra,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 36 2ª fase (28 de setembro de 1931) “Campanha de reabilitação,” *Progresso*, Ano IV, Num. 41 (4 de outubro de 1931)
- (84) Butler, *op. cit.*, p. 113. ミッチェルも同様の見方を示している。Mitchell, *op. cit.*, p. 130.
- (85) Ferrara, *op. cit.*, pp. 66–67.
- (86) 規約の全文は以下に掲載されている。Ibid., pp. 64–66.
- (87) *Diário de Santos* (20 de dezembro de 1931) citado em Mitchell, *op. cit.*, pp. 131, 150. 当時、黒人戦線は20万人の組織員を擁すると称していたとレイテは回想している。Leite, *...E disse o velho militante*, p. 94.
- (88) “Editorial da Frente Negra Brasileira,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 38 2ª fase (20 de dezembro de 1931) Andrews, *op. cit.*, p. 149. 各提携組織は、それぞれの内部の問題に関しては自律性を有していたとミッチェルは指摘している。Mitchell, *op. cit.*, p. 135. なお、以下は提携組織に関わるもので興味深い。Miguel Barros, “Discurso do representante da Frente Negra Pelotense,” em *Estudos Afro-Brasileiros: Trabalhos apresentados ao 1º Congresso Afro-Brasileiro reunido no Recife em 1934*, 1º volume, Rio de Janeiro: Ariel, 1935, pp. 269–271 (1988年に再版されたものを参照); Jeferson Bacelar, “A Frente Negra Brasileira na Bahia,” *Afro-Ásia*, nº 17 (1996) pp. 73–85.
- (89) Barbosa et al., *op. cit.*, p. 40; Leite, *...E disse o velho militante*, p. 123.
- (90) Leite, *...E disse o velho militante*, p. 93; Butler, *op. cit.*, p. 117.
- (91) フェルナンデスが引用しているアルリンドの証言による。Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 56.

- (92) 注(91)に同じ。ルクレシオはこの他に、ディレイタ通り(Rua Direita)沿いの商店による黒人差別に抗議するデモ行進をおこなったとも証言している。Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 54-55.
- (93) Mitchell, *op. cit.*, p. 131; Butler, *op. cit.*, p. 115.
- (94) 働きかけの経緯に関しては、著作によってくい違いが見られる。アンドリュースの著作やルクレシオの回想では、黒人戦線はヴァルガス大統領に派遣団を送って請願したとされているが、フェラーラが引用しているペドロ・パウロ・バルボア(Pedro Paulo Barbosa)の証言では、警察長官デ・ファリアス(Oswaldo Cordeiro de Farias)に対して抗議を申し入れたとされている。Andrews, *op. cit.*, pp. 150-151; Barbosa et al., *op. cit.*, p. 55; Ferrara, *op. cit.*, pp. 74-75. 黒人戦線の一員で、市民守備隊に入隊したリベイロ(Marcello Orlando Ribeiro)によれば、1932年に彼を含む200人の黒人が市民守備隊に加わったという。Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 83-85.
- (95) Mitchell, *op. cit.*, p. 134; Butler, *op. cit.*, p. 115. 「黒薔薇」については、Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 18-21, 50-51を、楽団については *Ibid.*, pp. 20-22を、それぞれ参照のこと。『人種の声』第1号にはヘアサロン、歯科診療室、図書館の、第2号には仕立所の、第7号にはサッカーチームの、第9号には共済組合の、それぞれ広告や情報が確認できる。A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 1 (18 de março de 1933) ; A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 2 (25 de março de 1933) ; A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 7 (29 de abril de 1933) ; A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 9 (13 de maio de 1933) ピント(Regina Pahim Pinto)は、『人種の声』紙面および聞き取り調査から、様々な娯楽・文化活動および社会サービスとそれを担当する各部(departamentos)をリストアップしている。Regina Pahim Pinto, *Movimento negro em São Paulo: Luta e identidade*, tese de doutoramento, São Paulo: Departamento de Antropologia da Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas da Universidade de São Paulo, 1993.
- (96) Mitchell, *op. cit.*, p. 135; Butler, *op. cit.*, p. 118; Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 55; Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 42, 47-48. 音楽の講座については、以下に告知がある。A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 34 (31 de março de 1934) また、組織員からのトラブルにまつわる相談への対応は『人種の声』の公報欄でも通知された。たとえば、次を参照されたい。“Comunicados da F. N. B.,” A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 7 (29 de abril de 1933)
- (97) Mitchell, *op. cit.*, pp. 132-133; Ferrara, *op. cit.*, p. 67; Andrews, *op. cit.*, p. 149; Butler, *op. cit.*, pp. 115-116; Barbosa et al., *op. cit.*, p. 50. 日曜集会の告知は、たとえば『人種の声』第15号に見られる。A *Voz da Raça*, Num. 15 (1 de julho de 1933)
- (98) Mitchell, *op. cit.*, pp. 133-135.
- (99) *Ibid.*, pp. 155-156.
- (100) Ferrara, *op. cit.*, p. 68; Mitchell, *op. cit.*, p. 135. ただし、創刊からしばらくのあいだは紙面に販売価格や購読料が記載されており、無料となったのは途中からとも推察できる。
- (101) Ferrara, *op. cit.*, pp. 64-66.
- (102) アルリンドの立候補にあたっての所信表明は、次に掲載されている。Arlindo Veiga dos Santos, “Aos Frentenegrinos, aos Negros em geral e aos demais Patricios, especialmente Trabalhadores e Produtores,” A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 7 (29 de abril de 1933) また、以下もあわせて参照されたい。“O memoravel pleito de 3 de maio,” A *Voz da Raça*, Ano I, Num. 8 (6 de maio de 1933)
- (103) 黒人を対象にした有権者登録キャンペーンの告知は、たとえば次に見られる。“Alistamento eleitoral,” A *Voz da Raça*, Ano IV, Num. 67 (julho de 1937) 当時は文盲者には選挙権が認められていなかったため、黒人に対する教育は政治的影響力の増大に直結するものだったと、パトラーは指摘している。Butler, *op. cit.*, p. 128. ルクレシオの証言もこれと符合している。Barbosa et al., *op. cit.*, p. 42.

- (104) Andrews, *op. cit.*, pp. 150, 305; Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 58-59.
- (105) *Ibid.*, p. 44. ルクレシオは自身も選挙に立ったことがあると語っている。
- (106) Leite, ...*E disse o velho militante*, p. 94. 黒人戦線発足からまだ日の浅い、1931年12月20日付けの『夜明けのラッパ』の記事では、たしかに評議会の一員としてレイテの名を見つけることができる。“Editorial da Frente Negra Brasileira,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 38 2ª fase (20 de dezembro de 1931)
- (107) アルリンドの思想については、バトラーが掘り下げて考察を試みており、参考になる。Butler, *op. cit.*, pp. 119-123. レイテによれば、アルリンドはブラジルのファシズムを代表するインテグラリスタ運動(Ação Integralista Brasileira)の第一回大会に参加し、同運動に対する黒人戦線とその20万人の組織員の連帯を表明したという。Moreira e Leite, *op. cit.*, pp. 16-18 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 59) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 94, 128. 黒人戦線はファシズムをまねた私兵組織(Milícia Frentenegrina)をも擁していた。Andrews, *op. cit.*, pp. 153-154. また、公式機関紙『人種の声』の標題部を飾る「神、祖国、人種、家族」という題辞は、インテグラリスタ運動の掲げていた「神、祖国、家族」の模倣だという。Butler, *op. cit.*, p. 121.
- (108) Leite, ...*E disse o velho militante*, p. 94.
- (109) *Ibid.*, p. 94. 黒人戦線の誕生により、そこに活動の場を移すため『夜明けのラッパ』を離れる黒人たちが続出したという。Butler, *op. cit.*, p. 124. そのなかにはレイテの盟友デ・アギアルとフェレイラもいた。レイテの言にしたがうなら、前者は黒人戦線に社会的地位のある黒人たちが集っていたことに惹かれ、後者は『夜明けのラッパ』への嫌がらせ目的で黒人戦線に引き抜かれたとのことである。Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 68-69, 102. 一方、創設後まもない時期に黒人戦線から離脱した者たちには、レイテらの他にアルベルト・オルランドなどもいたという。Moreira e Leite, *op. cit.*, pp. 16-18 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 59)
- (110) *Ibid.*, p. 20 (citado em Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, p. 60) “Judas da Raça,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 37 2a fase (3 de novembro de 1931)
- (111) 詳細な経緯は以下に詳しい。Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 67-68; Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 99-100.
- (112) *Ibid.*, pp. 99-100; Chibata, sem anno, sem numero (fevereiro de 1932) 黒人戦線の発足後すぐにレイテらは袂を分かったにもかかわらず、『夜明けのラッパ』はしばらくのあいだ黒人戦線に対して好意的な記事を掲載している。“Justiniano Costa” & “Editorial da Frente Negra Brasileira,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 38 2ª fase (20 de dezembro de 1931); “Um soldado desconhecido!...,” *O Clarim da Alvorada*, Ano IX, Num. 39 2ª fase (31 de janeiro de 1932) 矛盾とも思えるこうした状況について、バトラーは、『夜明けのラッパ』の運営組合(Sociedade Cooperativa)の長であったフレデリコ・バプティスタ・デ・ソウザが黒人戦線の圧力に屈していたためとの見方を示している。その証として、スタッフあるいは寄稿者であったレイテ、エンリケ・クーニャ、ジェルヴァジオ・デ・モラエスらによる「闘う友の同盟(Liga dos Amigos da Luta)」の結成と、そこにおけるフレデリコ・バプティスタ・デ・ソウザの不在を挙げている。Butler, *op. cit.*, pp. 123-124; “Liga dos Amigos da Luta,” *O Clarim da Alvorada*, Ano VIII, Num. 37 2ª fase (3 de novembro de 1931); “A grêve,” *Chibata*, sem anno, sem numero (fevereiro de 1932)
- (113) *Chibata*, sem anno, sem numero (março de 1932)
- (114) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 100-102; Barbosa et al., *op. cit.*, pp. 68-69. レイテはアルリンドが首謀者だと警察に訴え出て、アルリンドは聴取のため出頭を余儀なくされた。
- (115) “Nunca nos sentimos tão grande: O assalto, na calada de noite, desta redacção, por um bando sordido de assaraliados, bebados e desordeiros!...” & “Deus está conosco!...,” *O Clarim da*

- Alvorada*, Ano IX, Num. 40 2ª fase (27 de março de 1932) 『夜明けのラッパ』編集部襲撃の事件により、黒人戦線の威信は著しく失墜したという。Mitchell, *op. cit.*, pp. 136-137. なお『進歩』紙は『夜明けのラッパ』に同調し、事件への抗議を表明したことが第2期第41号に掲載されている。“*O Progresso*,” *O Clarim da Alvorada*, Ano IX, Num. 41 2ª fase (13 de maio de 1932)
- (116) ただし、この後、単発的には1933年と40年にそれぞれ1号ずつ発行されている。注(61)を参照のこと。
- (117) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 103, 109-123.
- (118) *Ibid.*, pp. 121-122.
- (119) *Ibid.*, pp. 103-104.
- (120) 黒人戦線は、内部に「32年革命」への共感者が多数いたにもかかわらず、彼らを追放したという。Mitchell, *op. cit.*, p. 137.
- (121) Leite, ...*E disse o velho militante*, p. 107; Barbosa et al., *op. cit.*, p. 78.
- (122) レイテの語るところによれば、黒人戦線が警察に対していわれなき罪を申し立てたことで、フェレイラはサンパウロを去らねばならなくなり、数年後にペトロポリス(Petrópolis)で死去したという。Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 69-70. またデ・ سانتアナに関しては、黒人部隊を去ったのち、「政党の設立を試みたもののうまくいかなかった」と述べているが、これは『新たなブラジル』(*Brasil Novo*)を機関紙として発行した急進民族主義党(Partido Nacionalista Radical)のことを指すと思われる。*Ibid.*, pp. 107, 123. デ・ سانتアナはのちにヴァルガス体制に対する「破壊活動」のかどで投獄されたという。Butler, *op. cit.*, pp. 124-125. 『黒人論壇』で発行が確認できるのは、次の第1号のみである。*Tribuna Negra*, Ano. I, Num. 1 (1ª quinzena de setembro de 1935)
- (123) Mitchell, *op. cit.*, p. 137; Leite, ...*E disse o velho militante*, p. 117.
- (124) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 105-106.
- (125) Mitchell, *op. cit.*, p. 136; Andrews, *op. cit.*, pp. 149-150. ただし、一般組織員にとってより重要だったのは、上層部の関心事にすぎなかった政治的イデオロギーよりも黒人戦線の提供する社会サービスの方であり、これこそが黒人戦線成功の要因だったとするバトラーの見解は念頭に置いておく必要がある。Butler, *op. cit.*, p. 118. さらに、Mitchell, *op. cit.*, p. 134も参照のこと。
- (126) Butler, *op. cit.*, pp. 125-126.
- (127) Fernandes, *A integração do negro*, vol. 2, pp. 52-58を参照されたい。
- (128) Moura, *op. cit.*, p. 157.
- (129) Leite, ...*E disse o velho militante*, pp. 130-135.
- (130) *Ibid.*, pp. 136-137.